

# Renaissance Symposium

'16秋

「街をアートで遊ぶ  
-地域が生まれ変わる-」  
シンポジウム記録



Mukogawa Institute of Esthetics in Everyday-Life  
武庫川女子大学 生活美学研究所

■

「街をアートで遊ぶ - 地域が生まれ変わる -」  
シンポジウム 2016年秋

■ CONTENTS ■

■

1 街をアートで遊ぶ - 地域が生まれ変わる -

講演 1 上田假奈代 (詩人、詩業家、大阪市立大学研究員、  
ココルーム代表)

講演 2 日下 慶太 (コピーライター、写真家、  
セルフ祭実行委員)

講演 3 林 寿美 (インディペンデント・キュレーター、  
国立国際美術館客員研究員)

2 パネルディスカッション

登壇者：上田假奈代 (前掲)

日下 慶太 (前掲)

林 寿美 (前掲)

大坪 明 (武庫川女子大学 教育研究社会連携  
推進室長)

3 総括

藤井 達矢 (前掲)

上田假奈代 (前掲)

日下 慶太 (前掲)

林 寿美 (前掲)

大坪 明 (前掲)

進行：藤井 達矢 (生活美学研究所)

総合司会：松本佳久子 (生活美学研究所)

(2016年12月3日 甲子園会館にて)

# 1

## ■ 街をアートで遊ぶ - 地域が生まれ変わる - ■



**松本:** こんにちは、定刻になりましたのでただいまより武庫川女子大学生生活美学研究所、第26回秋季シンポジウムを開催いたします。本日は行楽日和のきれいな晴れの陽の中、本学までお運び下さいますとありがとうございます。本日司会進行を務めさせていただきます生活美学研究所の松本佳久子と申します。よろしく願いいたします。

冒頭から大変恐縮ではございますが、本会場にて携帯電話の使用はできませんので、どうぞ電源の方お切りいただければと思います。ご協力よろしくお願いいたします。また館内の撮影が禁止されておりまして、せっかくの天気の中大変恐縮ではございますが、庭の方への直接お立ち入りいただくこともできませんので、どうぞ窓からの景色をお楽しみいただければと思います。また本会場にてホームページや刊行物の掲載のため写真撮影をさせていただいております。もし差支えがある方がいらっしゃいましたら会場のスタッフまでお申し付けくださいませ。

それでは本日のテーマですが、当研究所では毎年1つずつテーマを設けておりまして、今年は「遊」遊びという一文字をテーマにしております。秋季シンポジウムにおきましても遊びというテーマにちなみまして「街をアートで遊ぶ - 地域が生まれ変わる - 」というテーマで開催しております。多才な第一線でご活躍の講師をお迎えしておりますので、どうぞお楽しみ下さい。それでは開会に先立ちまして、生活美学研究所長森田雅子よりご挨拶申し上げます。森田所長よりお願いいたします。

**森田:** 武庫川女子大学生生活美学研究所第26回秋季シンポジウム「街をアートで遊ぶ - 地域が生まれ変わる - 」によるこそお出かけ下さいました。生活美学研究所所長の森田雅子でございます。

紅葉狩りの時期も終わり、年の瀬も迫ってまいりました。そのお忙しいこの頃、お運び下さいますと御礼申し上げます。今日は皆様のために選りすぐりの個性的な先生方をお迎えしております。詳細



は後ほどご紹介があると思いますが、詩人・ココラム代表の上田假奈代先生、コピーライターの日下慶太先生、インディペンデント・キュレーターの林寿美先生、お三方我が国を代表するアーティストとキュレーターが駆けつけて下さっています。少数精鋭の皆様にとってもじゅうぶんセンセーショナルかなと思っています。そして講師の先生方に対しまして武庫川女子大学で地域とアートの連携という分野を代表する3名が対応しております。生活美学研究所の方では音楽療法が専門の松本佳久子研究員が総合司会を、そして船坂ビエンナーレ発起人の藤井達矢研究員がパネルディスカッションのコーディネーターでございます。ディスカッションでは本学の教育研究社会連携推進室長の大坪明が指定討論者として登壇いたします。

さて、先ほどお話しにもありましたように、今年生活美学研究所の年間テーマは「遊」です。振り返りますと2012年は震災に寄り添い年間テーマは「影」、シンポジウムテーマは谷崎潤一郎の「陰影礼賛」でした。そして人の絆と繋がりを意識して2013年は「里」、宮澤賢治の甥・宮沢和樹さんに来ていただきました。そして去年2015年は暮らしの大元を見直す趣旨で「素」と年間テーマを定めました。今年2016年は転じて「遊」です。人は生真面目に暮らしを堅苦しい枠にはめ込みがちです。時には無駄を楽しみ、目的から外れた迷走や道草をしてみるとかえって可能性を掴むということはないでしょうか。平成になり2000年代以降、日本では地方創生とアートを意識したプロジェクトが熱い注目を浴びています。人が暮らす地域、街をアートの様々な切り口から遊ぶことを通じて新たな感覚が呼び覚まされ、そこにあるべき美学や社会が要求するアートのあり方など多くの課題が私たちに突き付けられます。実はすでに遙か昔、西ドイツでは1970年代以降、昭和ですね、現代美術の巨匠ヨーゼフ・ボイスが社会彫刻というものを提唱していました。社会彫刻は人間の創造性を通じて作り上げる社会の新しい仕組みを目指すといっていると思います。

芸術大学を釜ヶ崎で運営するとはどういうことなのか。大阪通天閣近くの新世界で商店街ポスターという、目指すものは何なのか。忘却をテーマとした横浜トリエンナーレ2014とその波及効果について、先生方に実体験を元に世界観をお伝えいただけます。また後半のパネルディスカッションではフォーラム会員さんを交え、アートと地域連携の効果の検証を含めまして活発な研究討議を目指します。皆様ぜひ話を耳を傾けるだけでなく、立場を変えてご提案下さり、ディスカッションの場に身を投じて下さいませ。本日の研究交流を大いに楽しみにしております。

先日、毎日新聞などで甲子園ホテルでの思い出の写真展の様子が

■

紹介されました。これは阪神間の地名、例えば甲子園などに隠れている様々なシンボルや意味を発掘する、生活美学研究所の甲子プロジェクトがコラボして行われたものの1つです。こういった意味で地域と共に取り組み、地域資料を活性化する研究プロジェクトを今後とも実践して参ります。生活美学研究所を今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。改めて、ご来場ありがとうございます。本日は最後までごゆっくりと研究交流をご堪能下さいませ。ありがとうございました。

**松本：**森田所長ありがとうございました。ただいま森田所長からもご案内させていただきました通り、本日のプログラムですが2部構成でございます。1部が本日の先生方3名から各40分の講演が3題ございます。その後休憩を15分設けさせていただきます、第2部はパネルディスカッション80分を予定しております。ご質問等ございましたら、ぜひ休憩時間にまたご再考頂きまして、ぜひパネルディスカッションの中で活発な議論をお願いできればと思います。それでは講演1に早速入らせていただきたいと思います。

講演1は「釜ヶ崎で表現の場を作る喫茶店」ということで講師は上田假奈代先生です。お手元のプログラムにもプロフィールがございますが、3歳より詩作、それから17歳から朗読を始められ、1992年から詩のワークショップを手掛けておられます。2001年から詩業家宣言を行われ、さまざまなワークショップメソッドを開発され、全国でご活動中です。2003年にココルームを立ち上げ「表現と自律と仕事と社会」をテーマに社会と表現の関わりを探っておられます。2008年から西成区（通称・釜ヶ崎）で喫茶店のふりを、また「ヨコハマトリエンナーレ2014」には釜ヶ崎芸術大学として参加されています。詩写真集「うた」「こころのたねとして～記憶と社会をつなぐアートプロジェクト」の共著などがございます。2014年度文化庁芸術選奨文部科学大臣（芸術振興）新人賞を受賞されております。それでは上田假奈代先生、よろしく願いいたします。

**上田：**はい、皆様どうもこんにちは。ご紹介にあずかりました上田假奈代です。今日はタイムスリップしたような素晴らしい場所で、皆さんとお目にかかれますことうれしく存じます。40分ちょっとと長いですが、お時間を共にしたいと思います。

さて一番最初のこのスライド、この後登壇されます日下さんに作って頂いたポスターです。広告代理店の電通さんと日本NPOセンターさんのコラボレーションで、広報の下手なNPOを応援する



プロジェクトでポスター作りましょうというのがあって、私たちも作って欲しいとお願いして、つい先日完成しました。この周りの額縁はココルームのゲストハウスに滞在しているお客さんや遊びに来てくれたお客さんが作ってくれました。段ボールです。なかなか上手にできてますでしょ。段ボールの額縁で「ドヤ街でドヤ顔」というキャッチコピーです。皆さん、ドヤ街というのがどんなものかご存知でしょうか。

私は奈良県の吉野生まれの詩人です。“I’m a poet”. です。ポエトはフランスの辞書では「役立たず」らしいです。私自身も自分のことを役立たずと思っている方で、生きるのが上手じゃないなと思いつつ、最近は大阪のおばちゃんとして成長しましたので人前でしゃべられるようになりました。30歳くらいまではしゃべることが苦手で赤面症で大変でした。社会不適應だという自覚もありつつ、こういう活動をしています。

ココルームというアート NPO が活動を始めたのは通天閣のある新世界です。今は観光地で串カツ屋やたこ焼きなどあり、観光バスもたくさん来ますが、私が呼ばれたのは2003年です。まだこのような状況ではなく、ちょっと危ない街という印象があったかと思います。そこに巨大な都市型遊園地・フェスティバルゲートがありました。経営が上手くいってなくて空き店舗だらけになり、そこに大阪市さんがこの空き店舗を活用して現代芸術の拠点形成を行う事業を立ち上げました。そこにいくつかの団体さんが入ります。現代音楽、コンテンポラリーダンス、現代美術、現代芸術です。まだ評価の定まらない現代芸術です。私は4番目に現代文学の担い手としてスペースを1つ任されました。とてもユニークな条件で家賃、光熱費は行政が負担します。人件費、事業費、管理費はありません。これをチャンスと見るのか、「わあ一面倒くさい」と思うのかは人それぞれの考え方ですね。私は詩人として仕事を作りたいという野心があったので、場所を持つことで何か仕事が作れると思い「やります」と返事をしました。関西のアート業界の状況は厳しい状況でした。仕事にするには大変難しい状況。今もそうです。多くの若者たちは自分が志している表現活動を余暇活動として、バイトをしながらでしか続けられません。そこで自分たちで仕事を作っていきたいという思いが私にはありました。部屋の鍵を借りて、まず掃除から始めて、3日目くらいに気づきました。家賃を行政が負担しているということは、税金をあずかったということ。これまで公共性など考えたことがなかったのですが、考えてみました。大それたことはできませんが、アート好きはついついアート好きが集まったりしがちですが、いろいろな人がこの場所を訪れ、出会える場所にしたら

■

どうかと考えました。それで喫茶店のふりをすることにしました。アート NPO の事務所には用事のある人しか来てくれませんが、喫茶店なら「お茶飲みに行こうか」と来てくれそうです。壁にユニークな絵画、チラシやポスター、リハーサルが始まりポロロンと面白い音楽が聞こえてくる。横でしゃべっている人たちの会話が面白かったり。表現というものがみんなの生活の中に滲んでいけばいいなと考えました。来てもらいやすくするために毎日オープンすることにしました。そのためにはお金もいりますから、喫茶店をしてお金を売って人件費を賄おうと考えました。それから一緒にご飯を食べることにしました。お金が儲からないので、スタッフが食べていくためには一緒にご飯を食べるしかないと思ったからです。昼と夜、賄いご飯を毎日作って食べます。そこにお客さんにも混ぜてもらおうことにしました。都会は孤食が多いですよね。1人で食べるより誰かと食べる、そんな店があってもいいですよね。お客さんには700円払ってもらっていますから、黙って食べるわけにはいきません。「どちらから来られたのですか」「何に興味がありますか」尋ねるといろいろ話してくれます。自分の興味のあること、あるいは悩み事。人ってあまり知らないぐらいの方が悩みをしゃべりやすいみたいです。私はご飯を食べながらいろんな人生の悩み事を聞くことになってしまいました。私一人の人生では想像もつかないくらいいろんなことがありますね、人生というのは。最初は困り事を聞いているだけなのですが、何かできることがないか考えることもあります。あの人を紹介したらいいかな、専門家にちょっと相談してみよう、とわたしが訪ねて行くこともあります。例えば薬物依存の人、アルコールやギャンブルの依存、発達障害、引きこもり、住まいや仕事、医者を探しているなど、いろんなことがでてくるので、やがて専門家と繋がっていくようになります。自分の困っていることや自分が話せる場所を作ること、お互いの表現を大事にする場がさらに表現を生み、生きやすくなるのではないかという仮説を持ち始めました。

さっき、今日のテーマの「遊ぶ」をふと見ていて思いつきました。私自身はこの活動を仕事を作りたいという自分の個人的な野心で始めました。正しいのかどうか、この方法がいいのかが全く未知数です。もしかしたら間違っているかもしれません。だから、いつも間違っているかもしれないと自分に問いながらやっています。不可能かもしれないし可能かもしれないという可能性は究極の遊びかもしれません。遊びの場所があるからこそ、みんながおしゃべりしながら、自分の心の奥にあるものをふっと差し出してしまふ。差し出されたものに対してふっと一緒に手を差し伸べてしまふ、そういう場



所を第3の場所のようなものかもしれないと思います。

さて、このスライドのかわいいアトムの絵、おでぶちゃんアトムですが、この絵を描いてくれたおじいさんの話をしますね。このおじいさんと出会ったのは、2008年です。ココルームがフェスティバルゲートで活動を10年間のはずであったのが、5年で追い出され、引っ越したのが隣の西成・釜ヶ崎。引っ越してすぐにこのおじいさんに出会いました。フェスティバルゲートでは100人くらい収容できる広さがありましたが、今度は15人も入れればいっぱいになる喫茶店です。毎日、彼は扉を開けて自分より怖そうな人がいると入って来なくて、開けて優しく人や人の話を聞いてくれそうな人がいれば入って来ます。1日5回くらい来て、お金は払いません。つねったり、せびったり、暴言を吐いたり、泥棒扱いしたり、かなり酷いんです。スタッフも本当に大変で「出入り禁止にして欲しいな」と言っていたのですが、「ちょっと待って待って」と。何かあるたびに、わたしは彼と話にならないけど話し合いました。喫茶店では小さなワークショップをよく開いていました。アーティストを呼んで何かするのではなく、スタッフのできることです。かるた大会、俳句を作る、自分のことを語る、習字など、遊びのようなことをやっていました。そのおじいさんも誘いますが「わし絶対に参加せーへん」と言います。でも毎日来ます。1年半くらいそんなやりとりが続きました。ある日私は「手紙を書く会」というのを自分の企画でやっていました。最近は何でもメールですましますから、たまには手紙を書こうということです。始めようとした時に扉が開いておじいさんが入って来ました。絶対に断られると思っていましたが、呼びかけました。そしたら彼は「書く」と言いました。私の隣に座って書き始めますが、手が止まります。「假奈代さん、『き』ってどうやって書くの?」と聞いてきました。日本は識字率が高いじゃないですか。書けないなんてことを想像していなかったことに気づきました。今まで誘ったけれど「わしややらん」と言うはずですよ。自分が字が書けないことを人にバレたくもないですよ。でも1年半の関わりの中で、この場は字を尋ねても誰もバカにしたり、笑ったりしないと彼自身が思ってくれたんですね。

表現できるというのはそこにいる皆が自分の存在をお互いに大事にできているか、作れているか、そういうことを問われていたのだと。

私は「生きることは表現だ、仕事は表現だ」と言っていたのですが、それは声高に叫ぶものではなく、そういう場を作れていますかということ自分を問わなければならなかったのです。そして、それは、もしかしたら社会の中でとても大事なこともかもしれません。文化、言葉、習慣、価値観の違う人たちと共に生きて行く時にとっても大事



■

なことかもしれません。考えが異なる人たちが自分のことを表現する。「そこはそうなんだ」「ここは私は違うけどね」とちゃんと言う。そこから始める。そういうことが大事なんじゃないかなと思います。私は西成・釜ヶ崎に引越し、表現の本当の根源的な意味や大切なところをこの釜ヶ崎のおじいさんに教えてもらったなと思っています。

釜ヶ崎という街、ご存知な方もそうじゃない方もいらっしゃるかもしれません。ビルの屋上から見た風景の写真です。ビルが乱立しています。このビル街がドヤ街です。1つの窓に1人が暮らしています。三畳一間です。この写真は1960年の写真で、青空の寄場です。土木建築などの仕事に携わる人を車で迎えにきて工事現場に連れて行きます。当時は劣悪な労働環境でした。警察も機能せず、本当にいろんなことがあったそうです。その抵抗は暴動という形で現れます。これまで警察では釜ヶ崎で24回暴動があったと言われています。最後の暴動は2008年です。ドヤ街はそれほど広いわけはありません。0.62km<sup>2</sup>で人口は25,000人、0.62km<sup>2</sup>にこの人口ですから、人口密度は大変高く日本一です。世帯は1.14人、ほとんど1人暮らしで、9,000人ほどの人が生活保護を受けています。保護率は年々上がっています。ホームレスの人数は1999年、2000年頃が一番多く、その後少なくなっています。現在は地域内で住所が不安定な状態の方が400人ほどです。シェルターの利用が300人前後、路上で寝ている方が100人前後です。日雇い労働者は一番多い時で3万人とも4万人とも言われていましたが、現在は1,500人くらいです。このグラフは大阪市のホームレスの方の数です。昼間の目視ですから、正確な数ではありません。2000年に8,000人ほどいます。今は減っていますが、厳しい状況であることには変わりありません。この街の85%が男性です。女性が歩いているととってもモテます。2008年一月釜ヶ崎の端っこの商店街に喫茶店のココルームを、2009年にカマン！メディアセンターを作りました。これは時代の流れです。2008年6月に24回目の暴動がありました。その年の10月がリーマンショックです。年末年始に年越し派遣村。日本がまるで釜ヶ崎化して行った年です。仕事を失い、寮に住んでいると寮を出なくてはいけなくなり、家がなくなり、家がなくなると、もう一度就職することは難しいです。釜ヶ崎と違い、日本の方は個人が分断されています。例えば、派遣の働き方で困っていることをどうしたらいいかがわからないという状況です。釜ヶ崎の場合は一応仕組みがあります。何かあった時にはここに言いに行きましょうとか、組合があり、路上では「あそこの現場は危ないよ」などの情報交換があります。相談窓口もいっぱいあり、巡回相談もあります。毎日どこかで炊き出しもあります。困っていると声を掛けてくれるお節介な人たちが

■

いっぱいいます。それが日本側から見たらすごいところだと思います。でも多くの人は釜ヶ崎は危ないから行ってはいけないと思っているので、来てはくれません。そこで、つなぐ回路を1つ作ってみようと思いつき、メディアセンターを作ることにしました。釜ヶ崎メディアセンターを作るつもりでした。商店街に企画書を見せて、ご協力をしていただけることになっていたのですが、オープン2週間前に「この商店街に釜ヶ崎という名前が付くのは困る」と商店会長に言われました。釜ヶ崎にはネガティブなイメージを付与されていて嫌だと思える人が中にはいらっしゃる。それは地域の分断を生み続けてしまった。地域の労働者と住民の間の軋轢を重ねてしまったということです。今は社会状況は変わり、生活保護になり、ここを終の棲家として生きている人も増えている。街のあり方が変わっている中で、外と釜ヶ崎をつなぎたいと思っていましたが、内側にある分断をもつなぎ直せるようなメディアセンターを作りたいと考えました。名前の「カマン！メディアセンター」は、釜を残しながらコモンズ、カモンとかけてこのような名前にしました。お金がそれほどなかったのも、ささやかなことしかできませんでした。テレビを置いて、そこに大阪市立大学が持っていた釜ヶ崎の古い写真を流しました。道行く人がふと足を止めて「あ、ここ知ってる」としゃべり出す、おしゃべりが生まれることをメディアと呼ぼうと。元スタッフでアーティストのアサダワタル君に月1回来てもらい、「カマン！TVの日」としてモニターにパソコンを付けYouTubeで道行く人のリクエストに検索をかけて番組にします。「あの歌手のあの歌が聞きたい」など。その日の番組を作ってしまう。彼は日常再編集家なので、このようなことは得意です。おしゃべりしながら色々な人の思い出話やその時のことを語らせ、テレビの前に段々人が増えて来て、一緒に歌を歌ったり、おしゃべりに花が咲きます。その時に労働者や商店主のおばちゃん、旅人たちも一緒に楽しみました。

毎日、良いこともあれば、嫌なことも喧嘩もいっぱいあります。その時に、2度と来ないで下さいではなく「今日は帰ってちょうだい」と言います。嫌なことは嫌とちゃんと言いながら、関係を作りました。毎日私たちはここで扉を開け、逃げないでやって行こうと決めたので、こちらもちょうど良いないと続けられないし、相手の方も気持ちが変われば来られる場所であって欲しいと思ったので、お互いに言いたいことを言い合って、そのような場作りに努めて来ました。

やがて、2011年あたりから高齢化がどんどん進んだように思います。おじさん達の行動範囲が狭くなり、商店街で待っていても

しょうがないと感じ、私たちが地域に出ることにしました。それが釜ヶ崎芸術大学です。地域の色々な施設を会場にしました。炊き出しの会場や野宿の人が100円でコーヒーを飲む場所、デイサービス、施設の談話室など、みなさんが日頃行き慣れている場所に、天文学、哲学、音楽、美術、芸術など、何やかんやの講座を押しかけするわけです。昨年で年間100講座ほど。そして、ヨコハマトリエンナーレ2014に呼んでいただきました。予算が足りず、クラウドファンディングで300万円集めて、横浜におじさんたちと嵐のように突っ込んで行き、わけがわからない圧倒的な熱量のいろんなものを展示空間に持って行きました。台湾での展覧会も二度行いました。

「こころのたねとして」と名づけた詩作の手法を編み出しました。おじさんと子供たちが聞き取りをして詩を作りました。釜芸は保育園や中学校・高校などにも出かけてゆくようになりました。釜ヶ崎芸術大学の成果発表はオペラです。「釜ヶ崎オ！ペラ」というのをやっています。

そうこうやっていますが、そうは上手く行っていないくて、経営は本当に難しく、継続することは難しいです。私たちは何の制度も利用してなく、政府からの補助金もないので自前で活動するにはいけません。釜芸は助成金をもらっていますが、それは事業費ですので人件費など本当に大変です。そこで、いろんな出会いがあり、そこで、ゲストハウスを始めることにしました。同じ商店街の中のもうすこし南に、35ベッドのゲストハウスを作りました。森村泰昌さんと坂下範征さんという元日雇労働者のおじさんと、2人がコラボレーションした部屋、森村さんに囲まれて眠る部屋となります。大きな庭があり、みんなでご飯を一緒に食べたり、先ほど話した文字を尋ねた安藤さんの作品の部屋。館内はボランティア、おじさん達、通りすがりの人たちが素人ながらにいろんな線を引き、熱量のある空間が出来上がっています。車椅子の人が使えるようにと作った部屋もあります。まだ宣伝が足りなく上手く行っていないので、みなさんには泊まりに、カフェにお茶に来てもらいたいです。

それでは、おじさん達の語りの映像を作っていて、少し見て頂けたらと思います。ヨコトリにおじさん達全員を連れて行くわけにはいけないので、映像を作りました。それが思いの外おもしろくて持ってきました。

<映像>「釜ヶ崎オ！ペラ～持まず、恃む釜ヶ崎」(2014年、若原瑞昌監督)

このおじいさん、紙芝居劇に衝撃の91才デビューです。93才で亡くなります。

■

<映像>

このおじさんが森村泰昌さんとのコラボレーションした坂下さんです。めちゃくちゃおしゃべりがおもしろいのですが、時間がないので少し飛ばして一番おもしろいところを。

<映像>

ずっとこんな感じでしゃべっています。台本があるわけじゃないですよ。谷川俊太郎さんにインタビューしてもらったおじさんがいます。この人は無口でほとんどしゃべりません。これからどう生きていきたいですかと尋ねたら、「一日、一日元気に生きていけたら」と。

<映像>

さて、こんどは、釜芸の成果発表会・釜ヶ崎オ！ペラの映像です。モノクロの世界から変わってカラーです。イギリスでホームレスの人にオペラのワークショップをしているオペラ歌手ロブさんです。ダンスがあり、天文学のお話があり、哲学や詩の朗読をしています。あ、急におじさんが歌い出す。次は即興で歌います。右足から左足へのメッセージと左足から右足へのメッセージを会場で受け付けて、その紙を手にてたらめな節を付けて2人で歌います。釜ヶ崎のおじさん達の元々持っていた力、生きて行く面白い力が、笑えます。

今日の表題の通り「釜ヶ崎で表現の場を作る喫茶店・ココルーム」という本を上梓しました。興味ありましたら読んで頂けたらと思います。ありがとうございます。

**松本：**上田先生ありがとうございました。本当にあの、お見受けしたところしなかやでおしとやかな感じの先生の、いったいどこからそんなバイタリティーがあるのでしょうか。またおっちゃん達の表現が生きる力をそのままリアルに表現されていてとても説得力があり、それを引き出す先生のバイタリティー、キャラクターが何より魅力的だなと感じさせていただきました。本当に上田先生、ありがとうございました。

続きまして次の講演です。コピーライター、写真家、セルフ祭実行委員の日下慶太先生、よろしくお願ひ致します。テーマは「アホがつくる町と広告」。プログラムにもプロフィールを書かせていただきました。世界をフラフラとされながら笑いで珍事件を克服され、電通に入社されました。コピーライターとして勤務される傍ら、写真家、セルフ祭顧問、UFOを呼ぶバンド「エンバーン」のリーダーとしてご活躍されています。商店街のユニークなポスターを制作し町おこしにつなげる「商店街ポスター展」を仕掛けられ、佐治敬三賞を受賞されました。この他に、東京コピーライターズクラブ最高新人賞、グッドデザイン賞など受賞が多数ございます。また、都築

■

響一編集「ROADSIDERS 'weekly」でも写真家としてご執筆されています。ツッコミたくなる風景ばかりを集められた「隙ある風景」を日々更新されております。それでは日下慶太先生、よろしくごお願い致します。

**日下：**すみません、改めまして日下と申します。よろしく申し上げます。こんな立派な所でやるとは知らず、もっと立派な服を着て来たら良かったと後悔しています。

今日の僕のポジションを言うと上田假奈代さんも林さんもアートと向かい合われていて、アートを糧にされて、そこで収入を得たりされていますが、僕はアートと広告の間を行き来しているというか、半分ずつ肩を突っ込んでいるというポジションで見えて頂けると、今回も変わった視点で見えて頂けると思います。いい意味で假奈代さんを見ていると釜ヶ崎に真っすぐに向かい合っているが、僕は少し無責任です。そこが1つの遊ぶところかもしれないと、改めて見て頂けたらと思います。では早速始めます。

先ほど仕事を紹介して頂きましたが、ごく最近の仕事は三戸なつめってご存知ですか。武庫川女子大学生だとわかるかもしれませんが、中田ヤスタカさんという日本で有名な作曲家の方、きゃりーぱみゅぱみゅなどを作曲している人の曲が新しく出しました。三戸なつめちゃんの「前髪切りすぎた」というデビュー曲のアルバムのジャケットを作ったり、「前髪切りすぎた」という1曲のPVを11本作り、11人のほぼ友達みたいな関西のアーティストにPVをお願いして割と話題になっているみたいなことをしました。普段は、電通で働いています。セルフ祭顧問です。ホームレスの人に仙人や仏さんの感じがあり、憧れていました。セルフ祭はアートなアホ祭で、僕は仮装する時にはホームレスになりたいと思いました。臭いが汚いの嫌だったので、嫁さんのシャネルの香水を振り回し「いい匂いのするホームレス」というパフォーマンスをし、本物と思ってもらえ良かったです。佐治敬三賞という立派な賞を頂いた時に、受賞パーティーを大阪の千日前のミソノという所でやりましたが、髪が長かったので地毛でちょんまげをしました。UFOを呼ぶバンド「エンバーン」をやっている、ナンバのミナミのライブハウスでライブをした時、UFOが現れました。ナンバのミナミの空になんと現れました。4回のうち2回現れました。ちょっと告知になりますが、12月18日に大阪ロフトプラスワンで闇鍋というイベントがあり、地下アイドルたちとブッキングされ、大阪のシュールなアーティストたちが集まるライブに出たりします。だいたいこのようなことをやっています。



元々は新世界市場という今年で120年を迎える商店街があり、通天閣から50mしか離れていない好立地なのに50軒中20軒くらいしか開いてないシャッター商店街がありました。そこに2012年から始めたのがセルフ祭です。「何でもあり誰でも参加OKの21世紀型の奇祭、新世界市場を奇妙なアートで埋め尽くす」という祭りです。元はコタケマンという絵描きのアーティストが始めました。僕は写真をやっているので「写真でも出してよ」と頼まれて入りました。2012年の5月25日～27日、写真を出しましたが、僕は寝ている所が好きで、食パンを食べながら寝ていたり、浅草で光合成しているかのように寝ているおっちゃん、酔っ払いなど寝ている人ばかりを撮っていて、これを商店街の潰れたカメラ屋の前という皮肉な場所に展示しました。巨大ミノムシの中に入って商店街でぶら下がっているアーティストや、「風呂ンティア」といって銭湯をモチーフにし実際にお風呂の絵の前に浴槽を置いて水を流して、5月にもかわらずおっさんが勝手に入ってさすが新世界だなと感じました。商店街でライブでは関西で有名なロックバンド「あふりらんぼ/AFRIRAMPO」のドラム担当びかちゃんがライブをしパレードをしました。新聞にも「町おこしアート 新世界市場に集結」という記事が載り、来場者も多く活性化ができたのではないかと思ったのですが、店の売上げが全く伸びませんでした。結局若い子が遊んでいただけになり、若い子と店主の交流がほとんどなく、それで良かったのかもしれませんが、私たちはもっと店のためになることを考えていました。メインメンバーが5人いたのですが、みんな30代で問題意識を持っていて、2011年の東日本大震災の後ということで社会を良くすること社会と関わりを持つようなことをすべきじゃないかとみんなが心のどこかで思っていました。「これではアカンのちゃうの」と店のためになることを考え、1、2ヶ月後の次のセルフ祭までに軌道修正しようということになりました。僕は立ち上げのメインメンバーではなかったのですが途中から入り、コピーライターでもあるので「祭おこして町おこすセルフ祭」と定義づけし色々やりました。お店のためになることって何をしましよるかとなり考えたのが、笑顔、挨拶、掃除、雑用と人間の基本に立ち戻りました。商店街で笑顔で「おはようございます」と言うとか、ただ朝の6時まで飲んでいただけでも6時に「おはようございます」と言うと「あんたら徹夜で頑張ったんやね」と言われ、挨拶もいいもんやなと思いました。掃除は商店街の掃除、雑用は雨漏りの修繕、配達の手伝いなど、フリーターの子が結構いたので、セルフ祭の事務所を格安2万円くらいで借り、そこに住み込み雑用をしました。掃除はメチャクチャ効きます。アートイベントすると言っても、

■

商店街のおっちゃん達はよく分りません。ところが掃除は「お前ら掃除してくれるんか」と急に変わり、何かと掃除から入るのがいいと学びました。このことからいうと、行政の人が街を変えようとして企画書を持って行くのですが、目撃したことです。商店街のおっちゃん達には企画書の内容は届かないです。企画書の内容はいいかもしれませんが、見てもらう環境にないということが正直なところです。そこで掃除をし、見てもらうコンディションをきれいにするのは有用な一つかなと考えました。

メンバーはフリーターが多いですが、僕は電通という会社に所属していて、それほど時間はありません。その中で自分にできることは何かと考えたことは、ポスターを作ることです。どうしてポスターを作るかという、それはまず自分が作れること、店のためになること、残ることだからです。店のためとはアートの作品はそれぞれのアーティストが表現するのですが、店のためではなく、当たり前ですが、自分のため、自分の表現のためだったりします。だからアートは良いのですが、店のおっちゃんからはクエスチョンなのです。あえて店のためになる広告アートができることと、後に残るということです。セルフ祭やイベントは一度やると人は来ますが、商店街は元の寂しい商店街に戻ってしまい、何か残ることをしないとあと思いました。ポスターは残るからいいのですが、一人で十数店舗のポスターを作れないので、会社の若手に手伝ってもらおう、勉強になるからいいじゃないかなあと思いつきました。会社も「おもしろいからいいんちゃう」とOKしてくれ、「新世界市場ポスタープロジェクト」が始まりました。電通社員32名が16チーム、コピーライターとデザイナー、広告制作単位の言葉担当と絵担当のミニマム単位に分かれてそれぞれの店舗のポスターを作る。新世界市場商店街全体のポスターを作るのではなく、肉屋、魚屋などのポスターをそれぞれに分かれて作っていくことにしました。ルールはおもしろいものを作ること、これは大事な基本です。お店にきちんと向き合うこと、お店にきちんと向き合っていないおもしろいポスターは認めないということです。これってどの店でもできるんちゃうの、これってどこの肉屋でもいいんちゃうのっていうような物は止めること。3つ目、制作は全てクリエイターに任せること。4つ目、プレゼンはなしでできたものをそのまま納品。5つ目、何があっても必ず提出すること。最後のルールは普通の広告ではあり得ないことです。広告とは広告主からお金をもらい、案A、B、案A～Cなど出してその中で一案を選んでいただいて、さらに何度もブラッシュアップして最終的に納品する形式で、つまり意思確認を何回もすることが広告です。それをすべてすっ飛ばすと

■

ということですね。広告というものは日本社会全体もそうなのですが、色々な意思確認が多過ぎてパワーを失っていると思います。ハンコの数が多ければ多いほど企画が丸くなっていくと言われていますが、広告はまさにそうです。担当者レベルでせっかくいい物ができていても、課長がややこしいことを言って、課長の言うような物を作ると、次は部長の言うように直して行き、次は役員でOKが出たと思ったら最後社長の一言で違うなどということが続きます。このような環境ではなかなかいいものができません。これでみんなフラストレーションを溜めていたし、時間の無駄だったので、みんなおもしろいもん作れ、一切のプロセスなしでと言うとやる気になりました。新しい広告制作のプロセスで、なかなか良くできたと思います。初めてみんなポスターをメチャクチャ見て、喜んでくれました。孫のような子がポスター作って来るわけです。「もったいなくて貼られへん」「店続けてよかった」「一生の宝物にするわ」と喜んでくれました。このポスターと共に第2回セルフ祭を行いました。左側にポスター、右側にビーチボールなどアーティストの作品、お箸の着ぐるみの子がせっかく作ったポスターにガンガン当たって行ったりしました。ファインアートと商業アートが混ざりあった見たこともない世界があって、アートイベントというどちらかと言うとファインアートや現代アートが多いのですが、広告は商業アート、デザインですが混ざり合うことはあまりなくて、広告は広告で分かれているのが普通です。混ざり合っていたことが、僕はそれがメチャクチャうれしくて、こんな世界見たことないなと結構感動してしまいました。セルフ祭は結構評判になり香港のある雑誌が取り上げてくれ、セルフ祭も良かったし、ポスター展も良かったので、祭が終わって1週間後の会議ではみんなメチャクチャニコニコしていました。一番最初行った時は「もう俺たちのこと放っておいてくれ」みたいな感じだったのですが、「あれ良かった、これ良かった」「あんなんがしたいねん」と言い、おっちゃん達が「ポスターずっと残してほしいねん」「ポスター展したいねん」と自ら言うようになりました。空き店舗をただで貸すから、ギャラリーに改装してもいいよと言ってくれ、ここから商店街の風向きが変わりました。ただただ受け身だった商店街の人たちが積極的に何かをしたい言うようになりました。空き店舗を自分たちで土壁を作り改装して行きました。だいちゃんという庭師が土を持って来て漆喰塗って完成し、電通の子達は来るべき次のポスター展に向けて作品を作って行き、ギャラリーが完成しポスターを飾りました。新世界市場のポスターができました。「買わんでいいから見に来てや」新世界市場ポスター展が始まりました。ニュースで紹介された5分ほどの映像を見て頂きます。夕方の「キャ



スト」というニュースですね。

〈映像〉ABC朝日放送「キャスト」(2013年8月28日)

寂れた商店街をちょっと変わった形で活性化しようという取り組みが今行われています。今年100周年を迎え大いに盛り上がっている通天閣とその周辺の町かと思いきや、実はすぐ近くにある新世界市場という商店街はシャッター通りと化してしまっているんですね。この市場を盛り上げようと実はちょっと刺激的なコンセプトのイベントが行われました。思い切って紹介します。キーワードは「ねえ奥さん。本当は、Mなんでしょ。」思い切ってご紹介いたします。どうぞ。通天閣です。麓は平日の昼間でも観光客でにぎわっているんですけど、一方で生活に密着した新世界市場商店街は寂れた雰囲気なんですね。お店はやっていないという所も目立ちます。うーん寂しいですね。かつては人の波で動けないほど賑わっていた新世界市場ですが、49店舗あった商店は今や22店舗と半分以下に。新世界が盛り上がりつつもこの一角は蚊帳の外です。このままではアカン、シャッター商店街を打破するため仕掛けたものそれは「わああ、本当のふんどしがポスター、らくちん、裏っかわもや！『締め付けてちゃ下は育たない。』(注1)これ何ですか。わあ、これはなかなかセクシーですよ。『ご近所の女のカラダを知り尽くしている男』(注2)裏側『ねえ奥さん、本当は、Mなんでしょ。』(注3)なんとも刺激的なこのポスター、実は婦人服店のものなんです。「あのポスターの方は。」「私」「本人ですか」「意味はそのままなんですけどね、MはMサイズの方です。」「MかSサイズの」「変な意味でとらないでほしい」「おもしろいですね」各店舗に掲げられたちょっとおかしなポスター。これこそ新世界市場復活のための切り札だと言うんです。店主自ら登場しているのも特徴で『おっちゃん』この方です。「世界一のお茶」「そうそう」「よう見たら。新世界一のお茶」「なるほど」ポスターを仕掛けたのは大手広告代理店電通の日下さんです。町おこしを応援しようと若手社員ら39人と一緒に店主と交流を重ねながら120点もの作品を完成させました。しかも全て無償なんです。「ぶっちゃけた話、電通さんで120枚ポスター作ろうと思ったらなんぼかかるんですか?」「いや、それは言ったら怒られるから止めとこう。まあそれなりに金額はいきますね。若手の子も面白いものを作らせてもらえるチャンスももらったので良かったです。」ポスター効果も徐々に始まっています。「すごいセンスいいですよ。」「おもしろい」「大阪らしい」今のところ売りに直結とまでは行かないようですが。「直接売りに響かなくても新世界市場というものがあるんやな」という感じで、お客さんが来て下さるので「宝物、宝物に



しようと思っています」そんな店主たちが勢ぞろいしたポスターにはこんなコピーが踊りました。「買わんでええから見にきてや」  
(注1: 婦人服店「なにわ小町」のポスター文言 注2, 3: 婦人服・肌着屋「生田商店」のポスター文言)

みたいなことになり、朝日新聞とかに来てもらい話題になりました。メディア37社が報道して、来客はかなり増えました。さらに第2弾ということで「文の里商店街ポスター展」大阪市阿倍野区でやりました。最初は自力でやっていたのですが、今回は大阪商工会議所、商店街振興担当の方がおもしろいからやりましょうということでやってくれました。第3弾伊丹西台ポスター展は伊丹市と一緒にやりました。こうやってポスター展は広がっていきました。鹿児島県の電通ではないフリーのデザイナーの方々がやりたいということで鹿児島のデザイナー十数名が、鹿児島の西の吹上で開催しました。押し掛けデザイン鹿児島という形で、デザインの力で勝手に押し掛けて、デザインの力で地域を元気にするみたいなことをされて、毎年ポスター展をしています。さらに三津の町ポスター展は地元愛媛大学と松山ビジネスカレッジ、アートの専門学校の学生と一緒にやり、どんどん広がります。僕は女川ポスター展、宮城県の津波で本当に大変だった所です。仮設商店街で仙台のクリエイターたちと一緒に雪降る中、ポスターをプレゼントしました。一番人気だったのが「ツイッター？やってないけどつぶ焼くよ。」つぶ貝の串焼き屋のおっさんや「明るいんでねくて、あかるくしてんのさ」地元の電気屋さんのポスターを作りました。2014年でしたかね「笑って被災地を支援するという被災地支援は新たな領域に入った」とジャーナリストの津田大介さんが言ってくれ、ちょっと違った形でどんどんできていきました。今、地方創生のプロジェクトをしています。福井県大野市人口は3万人の盆地です。若い子がどんどん出て行く町で高校生にポスターを作ってもらいました。高校生たちはポスターを作ることで、地元の魅力を知って、地元の魅力を知ってから大学に行くなり、出て行くのと、地元の魅力を知らずに出て行くのではかなりUターン率が違うということです。地元のポスターを作って魅力を知って、地元を自分の力で元気できるということをわかってもらい、さらにポスターを作ることで地元にもなかなか面白い大人たちがいること、高校生って親、親せき、先生しかローモデルがなく、この町にはこんな仕事しかないと思っていて、なかなか個性的な仕事をしている人、おもしろいおっちゃんなどとポスターを作ることで通じて繋いで、大野という町を元気にしていこうというので2年続いて行っています。NPOのポスターをみんなで作ろうということで、ソーシャルポスター展というものも行なっています。假奈代さんの

■

ココルームのも作らせてもらってます。ベトナム戦争に行っていたというココルームのおっちゃんのポスターを作ったりしました。商店街ポスター展では2016年度GOOD DESIGN AWARDをいただきまして、どんどんどんどん広がって日本全国に広がっている形がポスター展です。

一方その間、新世界市場は放ったらかしではないのかとお思いでしょうが、新世界市場では市場ギャラリーで三味線教室、カレー教室をして「いちばギャラリー」として人が集う場所になりました。セルフ祭は近くの日本橋小学校のPTAのおとまり合宿に呼ばれ仮面のワークショップ行ったり巨大流しそうめんを作ったりし、セルフ祭のアート活動が認められ、学校・養護施設などによばれるようになりました。元々事務所として借りた2万円くらいの汚い部屋を改装しカフェ&バーとしてオープンしました。変なイベントをし、さらに空き店舗を飲食店としてオープンさせました。セルフ不動産は空き店舗を商店街のおっちゃんに紹介してもらい、フェイスブックで公開しました。家賃2万、敷金なし、4畳半の間取りも入れて、仲介料もらわずにやっていたら、ピヨンさんという包丁研ぎの人が借りてくれ、あいちゃんというおばちゃんが借りてくれました。10時にシャッター開けて「あんたもっと家賃安くせーへんの」なんで俺がこんなことやってるのか思いながら、なかなかしんどかったですが、こんなことをやって2軒契約が成立しました。この2軒は商店街のおっちゃん達が持っている空き店舗だったのですぐだったのですが、さらに大家さんが商店街のすぐ隣に倉庫を持っていて「友達にそんなんやる子おらへんの？」ということで「ゲストハウスやりたい子おりますわ」ということで、2016年8月にゲストハウスTHE PAXをオープンし、外国人がたくさん来て賑やかです。他にも串カツ屋1軒入り、これは僕の手柄でも何でもないですけどね、魚屋1軒、服屋1軒、セルフ祭&ポスター展の効果で6店舗オープンしました。雑誌「ソトコト」で巻頭6ページの巻頭特集をもらい、いい感じで盛り上がって来ました。町を元気にするということができているのではないかなと思っています。

セルフ祭って何かないと、ここからまとめに入ります。セルフ祭は2010年以降ほぼ毎年開催しています。「己を祭れ」というテーマでやっていて、商店街のいろんな人たちがパフォーマンスをし、店を出したり、装飾があったりします。藤井先生に能勢電アートラインという能勢のイベントに呼ばれ、北極星祭を去年能勢の妙見山で行いました。妙見山は北極星信仰が残っていて、それがおもしろいということでセルフ祭のノリでやりました。みんなで仮装し、川西能勢口からロープウェイに乗り、頂上まで行き地元の吉川自治区をパ



リードし、妙見山にお参りし、UFO を呼ぶということで地元神社の神主さんとお坊さんと一緒に UFO 呼び、この時 UFO 来ましたね。またおいおい言いますが。セルフ祭の特徴は何かと言うと、1つ目は、誰もが参加できるように心掛けています。商店街のおっちゃんが詩吟を詠んだり、カラオケを歌い、85歳の現役大工さんが作品を作ったり、有名なアーティストで昔カヒミ・カリィに曲を作っていた渋谷系のスコットランド人のアーティスト、モーマスが来たり、プロからアマまで、子供も日雇い労働者も幅広く参加します。禪テープカットで、毎回メッチャ長い禪を引っ張り合いそこを商店街のおばちゃんにカットしてもらい始まります。大正区の沖縄の人に来てもらいパレードしました。間口を広くしています。2つ目は仮装で鬼や僕は釣りが好きなので人間を釣りたいなと思い、お金やクレジットカードや人間で釣りたいなと思い仮装しました。奥の方で動物の格好をしてバイオリンを弾いている手前を動物の格好をした人が横切りました。全然違うアーティストのものですが、「わあ動物の前を動物が横切ったわ」とケニアのサファリを思い出しました。仮装をしてみんなで集合写真を撮ったりしました。仮装を結構大切にしている、その場で衣装を貸し出し、鳥取から来た子に「仮装いや」と強引に仮装させるとハジケました。仮装するとアホになれます。普段の自分を脱ぎ捨ててお祭モードになります。仮装を大切にしています。決してハロウィンとは違い、あれはスーパーマンやスパイダーマンといったモデルがあります。そうではなく、自分なりの仮装をするように心掛けています。3つ目はごった煮です。敢えてごった煮にしようと思っていて、アーティストにこだわりません。だんじりのヤンキーをスカウトしたり、インド舞踊、ロカビリーを呼んだり、敢えてごった煮にしようとしています。当人から見たら全部一緒かもしれないですけどね。僕らなりにごった煮にしようと考えています。4つ目は表現したことない人が表現するようにしています。トリエンナーレとかは素晴らしいアーティストが来ますがそうではなくて、敢えてそうしようと思っていて、ファーストアルバムの衝撃の集合体を集めようと心掛けています。ポール・マッカートニーの23枚目のアルバムより、無名のバンドのファーストアルバムの方がおもしろいやろという感じでやっています。実は有名なアーティストも呼んだことあるのですが、僕らが主催したのにアーティストの所へ行き頭を下げ、作品持って来て展示し、作品を撤収し、またその人に届けてその人は当日来ないと、何のためにやっているのかなとなり、そういうのは止めようとなりました。表現したことがない人が表現するということで、趣味で俳句やっているおばちゃんを呼んで来たり、電通の子でも元々美大でアートを

■

やっていたので、忙しくてやっていない、しばらくやっていないという子呼んで来てやってもらったりしています。初めての人が表現できる場を作ることを一生懸命やっています。5つ目は祭りです。イベントではなく祭りです。セルフ祭がアートイベントではなく祭で、己を祭れと言っていますが、これはすごく大事です。祭りには儀式があります。毎回禪テープカットの儀式して一並びし、最後相撲を取り、UFOを呼んで終わります。なんかわからないですけど、祭はカッコいいし、地域に密着してあるべきものですし、祭りには特徴があります。地元の人は祭りには寛容的です。これなかなか面白いことがあって、とある地域でドラムの演奏をしたら即行苦情が来ました。和太鼓には全く苦情が来ないです。和太鼓はドラムの音より大きいのに。祭りには日本人は寛容的です。これがイベントとの違い、ドラムと太鼓の違いです。おもしろいなと思いました。己を祭れがコンセプトなのですが、神様は自分で自分たちで表現しよう、自分たちが神様になって祭をイベントにしようとするのがセルフ祭です。

さらにまとめていきます。商店街が表現の場としての商店街として機能し、ポスター展は電通クリエイターの表現の場で、セルフ祭はすべての人間の表現の場です。街をアートで遊ぶとは僕なりに考えるといろいろありますが、僕の考えではギブ&テイクです。新世界市場の人は「あんたらが町のためになんかしてくれるんやったら遊ばせたるわ」という感覚で、それが今僕がやっていることです。おじさん達はアートには興味ないです。「あんたなんでそんなけつたいな恰好してんの?」といった感じで、おじさん達の理解できないことが起きていると思います。でも「あんたらがおもしろいことして楽しんで、その結果町が元気になったらいいんちゃうの」とすごく思っています。結果、成立しているから、今もやらせてもらっているんやなと思っています。これがアートイベント化し、ポスター展がなかったらセルフ祭はなかったかもしれませんし、祭の後も彼らが掃除し手伝い、地域に入り込んだから今もできています。「何かやってや」「重い物運んでや」と結構来ますが、商店街の便利屋みたいになってやらしてもらってます。千日前の味園ビル、ここの2階は元々全店が入っていませんでした。今はたくさんの店が並び若者がたくさん集います入っています。週末などごった返しています。何をやったかという掃除したそうです。自分たちで地下にダンスミュージックのクラブを作り、最初に掃除したそうです。「そうなんやな」って言って、そうするとビルのオーナーが「掃除してくれるんやったら好きにしいや」となり、地域に溶け込むことはギブ&テイクになります。僕たちはお店のためになるとポスターを作



り、表現しました。町をアートで遊ぶための条件ではないかと思っています。さらにより効果的にするために「残す」ことが大事かなと思います。残っているから「Meets」が出している「大阪観光」に市場のポスターまでがおもしろいと掲載されました。ポスターがおもしろい商店街になったわけです。今でも4年前のポスターを商店街に飾っています。台湾でも話題になって台湾から来たり、写真を撮ったり結構話題になっています。「おもしろいポスターのある商店街」として未だ話題を呼んでいます。アートとは昔は箱もの行政と言われ色々なものを造り、ダメな結果もあります。ハードからハードソフトみたいなものがあればいいかなと思いました。つまり残るソフトです。ポスターみたいなものや映像かもしれないし、何かのシステムかもしれません。そういうハードなソフトみたいなことを残して行こうと心掛けています。おもしろいと社会に良いのかなと思います。マスコミが取り上げやすく、人と人、会社をつなげたりします。これが1つだけ抜けると大変です。おもしろいだけだと、映画、小説、漫画、テレビ番組もおもしろいでしょ、おもしろいものが世の中に溢れています。おもしろいだけだと抜けるのは難しいです。社会に良いだけだと逆に公共性ができ、ちょっとまじめに見えて、あくまでもニュースを送る人からの視点から言うと、おもしろいはニュースの話題性で、社会に良いとは公共性です。話題性があり公共性があるとニュースになります。話題性だけだとそんなことニュースでやる必要ないとなるし、公共性だけだとまじめすぎたお客さん、一般の人が見てくれるかなとなります。これは大事かなと思います。おもしろい、社会にいい、自分にしかできない3つが加わると他のとは違うことができます。自分にしかできないことはポスター展ではポスターを作ること、セルフ祭ではアートで表現すること、自分にしかできない表現ということです。こうやっていくと結構良くなって行くなと思います。おもしろく、社会に良く、自分にいいと執着心が湧いてきます。こうなると下心が出て来ます。商店街のポスターでいうと賞を取るということは下心です。人気が出るとか儲けるとか、そうなると執着心が生まれます。自分にいいとキャリアアップにつながり、これは大事かなと思います。アートで町で遊ぶためにはおもしろい、社会にいい、自分にいい、自分にしかできないと考えると1つの大きなヒントがあるかなと思います。

お祭システム、セルフ祭もそうですが、たくさん人間が下請けに関わることで大きなエネルギーが生まれると思います。1人の観客よりも1人の主催者、見るだけよりもちょっと参加する方がだいぶ感動の量が違います。僕たちはできるだけ来た人には何か少しでも参加してもらおうと考えています。一から参加してもほとんど

■

出来てから参加してもいいのですが、何かに参加させることを一生懸命考えています。ステージに無理矢理あげることを考えています。一発芸をさせるとか仕事を投げる、任せる、やさしいむちゃぶりが大事で、祭自体がそういうものだと思っていて、地域の中でも何かしら役割があります。地域の会合に集まったり掃除したり、月一の定例会議に集まったり、結構面倒くさいのですが、それをやっているからみんなで参加性があり、だからこそ祭りがありますね。ただその日だけ参加するのではなく、できるだけ下積みに参加してもらって、祭システムを大事にしています。祭システムは質より量です。量は質を凌ぐと思っていて、無名のアーティストも100くらい集まると何か凄いことになります。だから質より量でやっています。失敗をOKとする。アートイベントだと肩ひじ張らずに何でもいいよということをお大事にしています。最後に、アホになれということです。町を変えていくにはアホになることも大事かなと思っています。これが1つの社会を地域を変えていく1つの典型かもしれないと思います。最初「お前何言ってるねん」みたいな奴が勝手に始めたことがどんどんどんどん人が来て、「あ、俺も入っとかなヤバイな」となることが地域のような気がします。アホなることって大事だなと思っています。地方創生の観点から言うと石破大臣も言っていますが、地域を変えるのは若者、よそ者、若者で、どこかのよそ者のバカな奴が飛び込んで来て町を変えると思っています。アートというのは地方創生、地方を変えるアーティストはアホが多いと思います、飛び込める。だからこそ町を変えるきっかけ、発火点になります。その時にフォローは大事です。そこがどう地域に中に入っていくかが大事かなと思います。特にセルフ祭はアホになることを心掛けています。大愚の教え、これは仏教の禅のことばで「大いに愚かになれば道は拓かれん」と言った教えです。英語で言うと「Stay foolish, Stay Hungry」スティーブ・ジョブズのことばです。僕もアホになることを実践しようと思っていて、人生は短いと常々思っています。実は私事なのですが、2012年くらいに腎臓病になり、命に別状はなかったのですが2ヶ月ほど入院しました。その後、薬を飲んでいたのでなかなか復帰できず、2年ぐらい療養していました。入院して半年後に第一子が生まれ、2ヶ月後に妹が亡くなりました。年明けに親父が脳の病気で入院し、2ヶ月後に東日本大震災が起き、さらにその1年後に母親が亡くなりました。1年くらいで人の生死をまざまざと見て、人生は短いと言われますが、それを肌身を持って感じました。人間ってすごくいい感じの時に急に亡くなるわけではなく、だんだん衰えていって亡くなります。人間っていい時って短くなって思います。その時にスティーブ・ジョブズが「明

■

日死ぬと生きて生きる」と言います。彼は癌になってから、毎朝起きて洗面所の鏡の前で「俺は今日死ぬとしたら、こんなことしていいのか」と鏡に向かい合って自問自答していたそうです。それを僕もやってみたのですが、3日も続かなかったです。明日死ぬとまでは思えなかったです。まあ、心掛けていることはあって、照れと遠慮を捨てることも大事です。照れたりして、今恥ずかしいからちょっといいやと思ったり、先輩や上司の意見だからここは遠慮して、次何か来たらやろうと次のチャンスでやろうと思っても、実は次のチャンスなんて無いですね。今恥ずかしがってなにもしないとか、その人にはもう次会えないかもしれないと思います。そう考えたら、人生短いのに照れたり、遠慮している場合ではないと思ったら、大いに愚かになれたわけです。そうすると道が拓かれ、今日こんな所に呼んでいただいたわけです。アホになることが街の大事な遊び方であり、街を元気にするやり方だだと思います。以上、ありがとうございました。

**松本：**日下先生、ありがとうございました。本当に、講演のテーマ通りアホになるということで、踊る阿呆に見る阿呆とあるかもしれませんが、踊る阿呆をいかに一緒に増やしていくかというところで、地域のリソースを繋げていかれる先生のバイタリティーにまた感動させていただいたと思います。

では、続きまして次の講演に参りたいと思います。第3題は「華氏451の芸術―横浜トリエンナーレ2014がのこしたもの―」としまして、インディペンデント・キュレーター／国立国際美術館客員研究員の林寿美先生をお迎えしております。林寿美先生は国際基督教大学教養学部卒業後、1989年より川村記念美術館（現DIC川村記念美術館）にご勤務され、同館で「なぜ、これがアートなの？」「眠り／夢／覚醒」「ロバート・ライマン」「ゲルハルト・リヒター」「マーク・ロスコ」など多数の展覧会を企画されました。また2010年には「第14回アジア・アート・ビエンナーレ・バングラデシュ」の日本コミッショナーを努められています。2012年に同館をご退職後「ヨコハマトリエンナーレ2014」のキュレーターを努められ、以降は国内外のアート・プロジェクトに携わっておられます。それでは林寿美先生、よろしく願い致します。

**林：**最初に登壇された上田假奈代さんとは、2014年の横浜トリエンナーレで少しだけ関わらせていただきました。ただゆっくりお話を伺ったことがなかったので、今日初めて釜ヶ崎芸術大学を含む活動の数々についてお聞きして大変感銘を受けました。次なる日下慶



■

太さんは今まで私がやって来たこととは全く違う活動をされていますが、上田さんにしろ日下さんにしろ、個人が力を発揮して、もちろんお一人ではなく仲間がたくさんいらっしゃるのですが、人が力を発揮して何かを作り上げるという力強さがすごいなと思いました。

感想から入ってしまいましたが、私がこれからお話しする横浜トリエンナーレは、2001年に始まった国際芸術祭です。私が関わった2014年がちょうど5回目で、2011年以降は横浜市が中心になって開催しています。例えばイタリアではヴェネチア・ビエンナーレが100年以上も前から開催されていますが、横浜トリエンナーレは世界に誇れる芸術祭を日本でやれないかということを経験して始まったものです。最初は日本各地の地方自治体が名乗り挙げたようですが、最終的に横浜が選ばれました。当時、外務省の所轄だった国際交流基金が日本と外国の文化交流を図ることを目的に掲げ、展覧会事務局の役割を担っていたんですね。ところが途中から横浜市がそれを代わってやることになり、様相が変わってきました。つまり、第1回の横浜トリエンナーレは、現代美術を通して世界に日本のプレゼンスを発信するという意識のもと、キュレーターも複数いて、彼らを選んだアーティストを紹介するという、海外で行われているビエンナーレ、トリエンナーレと基本的に同じ構造で行われましたが、私が関わった2014年のひとつ前、第3回からは、横浜市が運営母体になったことで、市の中にトリエンナーレを盛り上げていかなければいけないということが認識され、メイン会場が横浜美術館になり、市役所内にトリエンナーレの担当部署ができるなど、ローカルな発信力が強まりました。その結果、来る人の層も展覧会の性質や役割も少しずつ変化して来ているのではないかと思います。いずれにしても先にお話しいただいた上田さんや日下さんのように、何かのきっかけである地域に関わった人がアートでその街を元気にして行くのとは違い、自治体や国など権威や資金力を持った団体が美術展を企画し、街やそこに暮らす人々を変えていくという点で、ベクトルの異なる芸術祭と言えるでしょう。

これからご覧いただく映像で、前回の横浜トリエンナーレがどのような展覧会だったかをおわかりいただけるのではないかと思います。私はキュレーターとしてこの展覧会に関わったのですが、私を含む5人の美術専門家を束ねるアーティストティック・ディレクター、芸術監督がアーティストの森村泰昌さんでした。森村さんが選ばれたのも、横浜トリエンナーレ側が何か新しい形でトリエンナーレを実施しなければならないと考えたことの表れです。普通、国際美術展ではキュレーターが選ばれ、展覧会の企画を練っていきます。アー

トと関わりながら、キュレーターではない人が展覧会を企画するとどうなるだろうと選ばれたのが森村泰昌さんでした。森村さん自身は名画や有名人、歴史上の人物に扮した写真作品で広く知られていますが、展覧会を企画したことは過去にはなく、この時が初めてで、非常に迷われたというか、困られ、色々なご苦勞があったと思います。そこで、私を含めて5人のキュレーター・チームが、森村さんが考える展覧会のイメージをどうすれば形にすることができるのかを考え、アーティストを推薦したり、作品を紹介したりして、森村さんのアイデアを実現するためのお手伝いをしたわけです。私自身、それまでは自分で企画することばかりで、他の人が考えた展覧会を形にするという体験は初めてでした。最初はかなり不安もありましたが、やってみると非常に勉強になることが多かったです。

先ほどご紹介いただいたように、「ヨコハマトリエンナーレ 2014」のメインタイトルは「華氏 451 の芸術」です。「華氏 451」というのはレイ・ブラッドベリが書いたSF小説『華氏 451 度』からとられています。森村泰昌さんがその本からヒントを得て、“華氏 451”をテーマにしたいと。さらに、サブタイトルが「世界の中心には忘却の海がある」。この2つはなかなか結びつかないかもしれませんが、『華氏 451 度』は近未来社会で人々が思想統制されてしまう話です。本を読むことが許されない世界、本を持っていると通報され、焼かれてしまう世界で（※華氏 451 度は紙つまり本が燃え始める温度）、人がどうなって行くか……。主人公はその体制に抗うわけですが、そうするなかで、形ある本が無くなってもそのストーリーを頭の中で記憶して口伝していく、語り部として後世に伝えていく「本の人」が登場して、小説は終わります。この本にあるように、忘れ去られる、忘却とはどういうことか、記憶に残ることだけでなく、忘れられたことの方に本当は意味があるのではないかということテーマにしたいというのが森村さんのアイデアでした。森村泰昌さんは30代でヴェネチア・ビエンナーレや海外の展覧会に参加され、当時から今に至るまで活躍を続けているアーティストとして高い評価を受けていますが、ご自身は京都市立芸術大学を卒業後、いったん企業に就職したものの三日で辞めてしまった。そうしたことから、社会の一員になれなかったというコンプレックスがおりなのか、社会におけるアーティストの役割についてずっと考えていらっしゃるのだと思います。そして、アーティストや芸術品のなかには、何かの事情でその価値が見出されず、忘れ去られたままのものがたくさんありはしないかという思いもおそらくあった。こうしたコンセプトのもとで、「ヨコハマトリエンナーレ 2014」は企画されました。紹介映像を見ながらどのような展覧会だったかを具体的

■

にお話していきたいと思います。

<映像>「華氏 451 の芸術：世界の中心には忘却の海がある」記録映像（ヨコハマトリエンナーレ 2014）

こちらは、メイン会場だった横浜美術館の入口前に、ベルギーのアーティスト、ヴィム・デルボアの彫刻作品を運び入れているところです。この映像はドキュメンタリーなので実際の展示風景にくわえて、トリエンナーレの開催中に行った様々なことが紹介されています。これが展覧会のメインビジュアルイメージですね。続いて、森村さんが音声ガイドを収録中の様子です。「皆様、今日は『ヨコハマトリエンナーレ 2014』にお越しくださいませありがとうございます。アーティストック・ディレクター、芸術監督を務めます森村泰昌です。今回の横浜トリエンナーレに、私は『華氏 451 の芸術：世界の中心には忘却の海がある』と、こういうタイトルをつけました。忘却ということばがキーワードなんです。私たち、日々の暮らしの中で何か大切なことを見落としていたり、気が付いてるのに知らないふりをしていたり、そういうことってないでしょうか。現代という時代がどこかに置き忘れて来てしまったり、失われていたりしていること、ないでしょうか。そんな忘却世界をめぐるおよそ 12 種の物語を皆さんと一緒に巡って行ければいいなと考えました」。

こんなふうに、いろいろな展示風景を映しながら展覧会の全体像が見てとれるようになっていきます。これは記者発表で森村さんが話している様子ですね。「世の中には隠されていることがたくさんあると思います。役に立たないとみなされて捨て去られていくものはたくさんありますね。膨大な量の失敗や敗北といったようなものもあります。それら忘れられていくもの、ここに眼差しを向けることが無意味だとは決して思えないのです。見えないもの、見てはならないとされるもの、語りえぬもの、語ってはならないとされるもの、あるいは子供の頃には持っていたのに、大人になると忘れてしまう空想や妄想、こういうものも普段私たちが見落としがちで大切な忘れ物なのではないでしょうか。『ヨコハマトリエンナーレ 2014』はこのような、私たちがどこかに置き去りにして来てしまった、しかし本当はずっと持ち続けておくべき忘れ物を取り戻す旅を目指しています」。これが森村さんのコンセプトです。国際芸術祭では、出品作家の国籍をバラエティに富むようにするのが定石ですが、森村さんはそこにはこだわっていません。

今、ご覧いただいているのは、マイケル・ランディというイギリスのアーティストの作品です、横浜美術館のエントランス・ホールに設置された、高さ 14 メートルに及ぶ巨大なゴミ箱に、アーティ

■

ストたちが自分が捨てるべきと考える作品を投げ入れるという、パフォーマンスを含んだものです。こちらは、釜ヶ崎芸術大学の展示スペースですね。……こうやって来場者の方々に作品の説明をしているのは、“ハマトリーツ!”と呼ばれる横浜トリエンナーレのサポーター・チームの方々です。15年間も続けていると、地元でもトリエンナーレのお手伝いをしたいという方がたくさん出てくるんですね。それから、国際美術展ではアーティスト・トークやパフォーマンスなど、作品展示だけではなく、その日しか見られないようなイベントもしょっちゅう行われています。「小さな箱の中に自分の好きな物を詰め込んでできたかのような作品ですね。ジョセフ・コーネルの作品には、どこかなつかしい雰囲気漂っています。こんな風にして自分の好きな世界に入り浸り、一人で楽しんでいたことは皆さんの幼少期にもあったのではないのでしょうか。でも、そんな小さなおもちゃ箱みたいな世界で遊んでいてはだめだ、世の中に出てもっと大きな仕事をすべきだと思い立ち、何だか焦ったりしてしまう。だんだんそのように子供の頃を卒業して、誰もが大人になっていくのでしょ」。

森村さんはアーティストック・ディレクターとして、様々な展覧会の広報活動にも非常に積極的で、テレビに出たり、雑誌の取材に応えたりするほか、音声ガイドのためにご自身で原稿を書き、こうしてナレーションまで担当されたのには脱帽でした。

これは映像作家トヨダヒトシさんの上映会、スライドショーの様子です。会期中に7回、横浜美術館の建物前や市内各所で行いました。こうしたイベントの運営は、ヨコハマトリエンナーレの事務局と“ハマトリーツ!”というサポーターの皆さんが担当し、パブリック・プログラムとして、展覧会と伴走するような形で行われました。それから、こちらは風変わりなイベントで、マイケル・ラコウィッツという出品作家が料理好きで、イラク料理をみんなに振る舞うという、パフォーマンス型ディナー。パブリック・プログラムと言いましても、大勢の方が参加できるものもあれば、この食事会のように10～20名くらいで参加するようなものもありました。イラクの料理を通じて作家の出自となるイラクの文化を知ってもらいたいと、ラコウィッツ側から提案されたものです。

これは釜ヶ崎芸術大学の「TAKIDASHI (炊き出し) カフェ」です。美術館前の広場にテントを組み、炊き出し料理を振る舞いました。また、釜ヶ崎芸術大学については、出張授業とも言えるイベントも行われました。こちらは「生きる哲学」と題された、臨床哲学者で看護師の西川勝さんによる講義です。「釜ヶ崎というところは皆さんご存知でしょうが、一人暮らしの人が多いです。で、生活も

■

非常に苦しい状況にあります。このような中で、人は考えざるを得ない。楽な時、人はあまり考えないです。やっぱり苦しい時、悲しい時は考えざるを得ない」。これは先ほど上田さんが紹介されていたのと同じ映像作品です。「頼らない、そう決めて生きて来た。1人で生きて来た」。釜ヶ崎のおじさんたちのインタビュー映像が続きます。それからなんと、釜ヶ崎のみなさんには横浜まで来て、狂言も披露していただきました。このプログラムは大好評でしたね。これは上田さんの講座、ワークショップ形式で、二人一組になって、相手に対して詩を作るというものです。「はい、もう一度おさらいしますよ。相手の人が見つけて来たら目を逸らさない。本当にじっと見ていたら顔のどこかがグッと来ます」。そしてこれは第3回の講座「まっかなお月さんを見る会」という夜間に行われたプログラムです。

ここからは、もう一つの会場、新港ピアというスペースの様子です。2008年の横浜トリエンナーレの時に造られた建物で、今はすでに取り壊されているのですが、トリエンナーレ会場として3回使われました。写真家のやなぎみわさんは近年、演劇も手がけられていて、台湾製の移動舞台車で今年の夏、初めて演劇公演を行ったのですが、派手な電飾で飾られたその移動舞台車を公演前にトリエンナーレで発表しました。

出品作家のアーティストたちが世界のあちこちからやって来て、ヨコハマという街を知り、作品を展示し、人々の前で話すという交流もトリエンナーレ中にはよく見られました。海外組については、ほとんどの方が横浜に来るのは初めてだったようです。メインとなる横浜美術館はきちんとした印象の会場ですが、こちらの新港ピアは倉庫のようなスペースで、より現代的な展示に向いていると言えるでしょう。また、森村泰昌さんの発案で中高生のためのプログラムを組みました。このグリーンのTシャツを着ている子がリーダーで、小学生たちに展覧会について説明していますが、彼ら中学生、高校生のリーダーには森村さんがきっちりしたレクチャーを行い、それを踏まえてリーダーが小学生を率いるといった内容の教育プログラムでした。

こちらは、展覧会の最終日に行われたクロージング・イベントの様子です。出品作の1つであった『Moe Nai Ko To Ba (燃えないことば)』という本を燃やすというパフォーマンスです。『華氏451度』が本を処分するという話ですから、それに引っ掛けて、世界でただ1冊しかない本を作り、その『Moe Nai Ko To Ba』を展覧会最終日の閉館直前に本に関わった関係者の方々に朗読してもらいました。そのトリを飾ったのが森村泰昌さん本人で、朗読後、その本



を展示室から持ち去ってしまいます。ですが、本がそこからなくなっても、『華氏 451 度』に登場する“本の人”のように、“ハマトリートツ！”、サポーターの方々が先ほどの本に収録されていたテキストを暗唱し続ける。一方、美術館前の池では、先ほど本を持ち出した森村さんが、“本の女神”に本を渡し、消防士の恰好をして再登場し、本を救い出します。なぜ消防士かといえば、『華氏 451 度』の主人公が最初は本を焼く仕事をしている昇火士＝ファイアマンだったのに、最後は自分が本を肯定するようになる、それに引っ掛けて、森村さんも主人公と同じ役割を演じているということです。さて、このドキュメンタリー映像をご覧いただいて、「ヨコハマトリエンナーレ 2014」にどのようなものが出品され、どのようなプログラムがあったか、概要をおわかりいただけたと思います。

途中で色々お話しして来ましたが、横浜トリエンナーレは横浜市が中心になって資金と人員の両面から大きく支えているものの、やはり要になるのはアーティストック・ディレクターの森村泰昌さんでした。森村さんがキュレーターではなくアーティストだったことから、この展覧会のコンセプトは出来上がっています。華やかさが求められる国際美術展なので、お客様をたくさん入れて欲しいとか、いろんな所から注目されて欲しいとかは当然ありますが、森村さんがテーマに掲げた“忘却”から森村さん自身はいっさい逃げませんでした。国籍や宗教、性別などバランス良くというオーダーについても、森村さんはそのまま「うん」とは言わず、やはりご自身が考える展覧会にふさわしいアーティスト、あるいは作品だけをどうしても出品したいと。そこは譲らず、毅然とした態度を取り続けたのが奏功したと思います。そういう展覧会作りに対する姿勢には、私自身、大きく学ぶところがありました。

先ほどの映像には出て来ていなかったのですが、この展覧会が地域に残したものとして、たくさんの関連プログラムがあります。「創造界隈拠点連携プログラム」と呼ばれたもので、横浜・関内にある BankART という現代美術のための展示施設や、黄金町という現代美術のイベントをやっている場所があります。これらと連携するようなプログラムが実施されました。また、会場のいろいろな商業施設がありますが、その中のレストランやお店で横浜トリエンナーレのチケットを見せると割引があったり、特別メニューがあったりもしました。さらに、地元の企業 20 社ほどがトリエンナーレの応援グッズとして特別な商品を開発してくださったり。これまで 5 回、10 年以上も開催していると、展覧会に直接関わる部分だけではなく、街全体にも経済効果をもたらしています。このような効果を数字だけで計るのは難しいのですが、2014 年の横浜トリエンナー



レの入場者数は89日間の会期中に21万人、一日平均2,348名でした。これは関西の状況と比較するとかなり大きな数字ですが、トリエンナーレにとっては、ちょうど目標を突破したかなというくらいです。運営側からすると、もっともっとたくさんの人に来てもらいたかったというのが本音かもしれません。しかし、先ほど日下さんが最後にお話しされていたように、社会にとって本当にいいものとは何か、おもしろいということは何なのか、今回の場合は森村泰昌さんが考えたおもしろさということですが、それはコンセプトに十分に反映され、普段美術に縁遠い方はテーマが難しいと思われたかもしれませんが、展覧会自体の評判は美術関係者にはとても良かったようです。先ほどの日下さんのお祭と相反するようですが、国際芸術祭と「祭」が付いていると、展覧会の内容を決めていくのにお祭の要素があるもの、祝祭性の高い作品を入れて欲しい、地味な作品は暗くなるし良くないのではと言われがちで、実際に企画会議でもそうした意見が出ました。ですが、森村さんは最初から「私は祝祭性は追及したくない、お祭り騒ぎをしたいわけではないのです」とおっしゃっていました。その結果、一見地味ながら森村ワールド、すなわち、森村さんの考える社会、世界、生き方が感じられる内容になっていたのではないかと思います。イベントとして成功することが一体何なのかについて、5回目の横浜トリエンナーレとして考え直す時期に来ていたのかもしれません。個人的には21万人という数字は決して少ないわけではないし、見た方の満足度や、どんな方がいらしてくださったのが重要だと思います。これほど世界中のあちこちでトリエンナーレやビエンナーレが開催されると、どうしてもテーマが似通って来るのですが、2014年の横浜トリエンナーレは、森村泰昌という人のかなり独自の世界観が示せたのではないのでしょうか。それまでにないタイプのトリエンナーレを実現できたという点で非常に意味があったと思っています。

ちょっと話しきれないこともありましたが、後ほど第二部の方で質問をお聞きする時間もあると思いますので、ひとまずこちらの方で話は終わらせていただこうかと思います。ありがとうございました。

**松本：**林先生ありがとうございました。第1部は三者三様のお立場から表現の根源となるアートの活動の中で街をどう繋ぐか、街にどういったものを残していくかについてお話しいただきました。それではただいまから10分休憩を挟ませていただきまして、第2部の方を再開したいと思います。よろしくお願い致します。

# 2

## ■ パネルディスカッション ■



**松本：**第二部を始めさせていただきたいと思います。登壇いただくのは第一部でご講演頂きました3名の先生方に加えまして、指定討論者、武庫川女子大学教育研究会連携推進室の大坪明室長にご登壇いただいています。また進行は生活美学研究所員の藤井達矢が務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。また、活発なご意見ご質問をお願いいたします。また次年度シンポジウムの記録集に反映させたいと思いますので、ぜひ質疑応答の際にはお名前などお聞かせいただければ幸いです。ではどうぞよろしく願いいたします。先生方よろしく願いいたします。

**藤井：**先生方、先ほどはありがとうございました。私自身も「アートで地域を何とか・・・」と、そういう活動をずっと続けてまいりましたので、私に向けても叱咤激励といますか、反省しろよと言われていたような気もしながらお聞きしていた次第です。昨今、アートで地域を興していく、アートと地域の関係性は一体どういったところにあるのが様々な現場で議論されています。それをお三方それぞれの視点で、それぞれの手口で仕掛けていって、「仕掛ける」というと何か押しつけがましいイメージになりますが、そうではなくて地域の人と共に、またその結果どうなるだろうといったことも想定しながらのお話だと思います。ただ40分間ではなかなかお聞きできなかったことや、もっとしゃべりたいことや、裏話もおありかもしれません。

先ほどご講演を糸口にもう少しこの辺を聞いてみたいとかということがあれば、ぜひまた後で今日参加されているみなさんにもマイクをお渡ししますのでぜひ議論に参加なさってください。地域におけるアートはどこに向かって行くのだろうか。特に日本、世界もそうですが、様々な問題を抱えている中で、アートに何ができるのだろうか。ひょっとしたら何もできないのかもしれない。しかしアートだからこそ何か夢を求められるのかもしれない。様々なことに思いを巡らせながら、私も拝聴しておりました。これからディスカッション



■

ンに入って行くわけですが、まず先生方から、補足などありましたらよろしく願います。

**上田：**現状は頭を悩ましていることがございます。街が大きな変わり目を迎えています。大阪市では西成特区構想というキャンペーンが行われて、大きなお金が動いたり小学校の統廃合があったりいろいろあります。街の高齢化はすごいスピードで進み、多くの人が亡くなっています。隣の阿倍野にハルカスという大きなビルができ、再開発が成功したので、なんと崖下の西成区の方もその余波を受けて中国人が投資して土地や物件を買っていきます。投資ですから地域がどうなるかより、土地の値段に注目がいくわけですから、街のことよりはお金ですよ。ジェントリフィケーションということば一浄化と言われますね、街はどんどんきれいになっていきます。アートも加担していることがたまにはあります。それも意識していなくても知らずに加担してしまうこともあります。私はこの活動を通して加担したいわけではなく、そこに生きている人たちの生きている証を表して、記憶を繋いでいきたいと思っています。異なる立場や考えを持っている人たちが同じテーブルについて表現し合うことで街のことを考えていくことや生きることを深くするような場を持ちたいと思っています。アートを利用してジェントリフィケーションに加担することも世界的によくあることですが、そこにどういう注意を向けながら活動していくかが課題だと思っています。変わりゆく中でどのように活動を繋いでいくか、それも課題として捉えています。とりわけ孤独死も多いので、死にまつわる場所、今日本では死について語ることはタブーとされてきましたが、すごく重要なことだと思っています。

**藤井：**ありがとうございました。

**日下：**僕さっきけっこうしゃべったので、大丈夫です。ちょっと押しちゃったし。大丈夫です。

**藤井：**ありがとうございます。

**林：**私は押しされちゃった方ですが、大丈夫です（笑）。次回の横浜トリエンナーレは来年2017年に開催されます。テーマは「島と星座とガラパゴス」。日本をはじめガラパゴス化した社会やコミュニティをどう世界とつなげるかというようなテーマだったかと思えます。さらにアーティストック・ディレクターによる企画ではなく、



養老孟司さん、アーティストのスツニ子！さん、美術史家の高階秀爾さんなど、各界の有識者の方々がチームになって展覧会を作り上げるという新しいやり方にチャレンジされているので、もし来年夏に横浜へ行かれる機会がありましたらぜひご覧になって下さい。

私は横浜トリエンナーレの仕事を終えて今西宮に住んでおりまして、これから関西を中心にキュレーターとして活動していこうとしています。関東と比べるとこちらは圧倒的に展覧会の量が少ないですし、できればガツンと心に響く展覧会のお手伝いをしていけたらと思っています。ぜひみなさんもこの関西地区のアート活動を盛り上げるためにご支援いただけたらと思います。

**藤井：**ありがとうございます。養老さん、スツニ子！さんということで楽しみです。期待しております。

それでは指定討論者である教育研究社会連携推進室長大坪先生からご感想を含めてお話いただき、そこから話題を広げていきたいと思っています。

**大坪：**その話をし出す前に少し私の、そもそも何故ここにいるのかということから話しておいたほうがいいかと思います。私自身の出自はそもそもの仕事は建築の設計をやっていたのですが、武庫川女子大学に参りまして、建築を教える傍ら街づくりにも関わりました。そのようなことから本年度から肩書に書いてありますように、教育研究社会連携推進室ができて、この3月でいったん退職したのですが、もうちょっと手伝いなさいということで今の立場を与えられまして、ここでお手伝いをしている状況になっております。私としては、肩書に付いておりますように、地域社会についてもう少しゆっくり考えてみよう、それをみんなと一緒にどうやったら元気にしていけるのか考えて実践していこうとしているわけです。そういう面からお話ししていきたいと思っています。まあ、いろいろおもしろいといいますが、私が知らなかったようなお話しも伺えたということから、今日のお話し聞かせていただいて良かったなと思っています。

いろんな実践がやっぱりあることが非常によくわかりました。そういう意味では私自身不勉強だったところもあるのですが、それだけではなく、こういうアートに関わるものがいろんなレベルのものがあるということが非常によく分って来ました。1つは上田さん、日下さんからご発表いただいた、非常に地場に密着して地元の人たちと一緒に汗をかきながらやるようなアートですね。もう1つはトリエンナーレという割と大きな枠組みの中で動かれてい

るものと2つがありますね。そういうものの違いって何なのだろうか。影響力はどういうところにあるのだろうかということ、もう少し具体的にお話しいただきたいなと思います。最初の上田さんと日下さんは、地域がこんなふうになったよと仰って下さったし、日下さんはアップテンポで今いろんなイベントが起こって来ていることをお話いただきました。トリエンナーレの方はそういう意味では日常的に街はどう変わったのというところが、ちょっと私にはまだ見えていないところでございまして、もしその辺の補足をしていただければありがたいです。

**林：**私は2014年の横浜トリエンナーレの1回をお手伝いしただけなので、初回から十数年の間に横浜という街がどう変わったかについて、あまり正確には申し上げられないと思うのですが、ただ1年と少しそこに住んでいた時に感じたのは、まず地元の方のほとんどが横浜トリエンナーレという展覧会の名前を聞いたことがある。行ったことがある人もかなりたくさんいらっしゃるということです。もちろん、横浜以外から横浜トリエンナーレを見に来るという人も大勢いらっしゃいます。それから、トリエンナーレの中核にいた私には見えなかった部分なのですが、今日ご紹介した映像にも出て来なかった、どこか市内の公園で関連のお祭があったとか、小さな規模であっても市民の方たちがトリエンナーレを盛り上げる様々な関連イベントをやられているそうです。こうして、トリエンナーレの開催とあわせて、なんとなく横浜の街が活気づいているように思います。また報告書によりますと、14億9,400万円の経済効果が生まれたということです。入場者アンケートでどこから人が来たのかわかりますし、展覧会開催中の観光客の横浜滞在時の宿泊や飲食を含む観光収入が一番大きいのではないのでしょうか。横浜は元々観光客がそれなりにいる所なので、トリエンナーレのためだけに来た人の数字が計りづらい部分はあるかもしれませんが、また、みなさまもよくご存じのように、直島でベネッセコーポレーションが行っている事業や福武財団の関わる瀬戸内国際芸術祭などは、これまで誰も来なかった島に大勢の人が来るようになって、その動員数や経済効果については非常に大きな数字を上げています。その中心になっている直島で言いますと、それまではほとんど高齢者の方しか住んでいなかった所に若いアーティストたちがやって来て自分で個展をしたり、スタジオを開いたりということがあった。そういう効果もあつた過疎地域で起こったのではないかなと思います。

**大坪：**あの、直島の事例などもお話しただいて、地域で人の定着



なども若干ですが起っているというお話を伺ったのですが、これは非常に大事ことだと思います。今地域が生まれ変わるというタイトルに即して言いますと、地域の中で本来アートのものは内発的に出て来て、地域がそれによって変わって来る。まさに上田さん達がやっておられる活動が多分そうだろうと思います。商店街のおっちゃんがポスターを自分たちで飾りたいと言い出した、これもそうだろうと思います。そういうふうになら発的に起こることによって地域が変わって来るということが必要なのだと思います。そういうことに関してもう少し皆さん方のご経験などで、この場でお話いただけることがあったらうれしいですけど。

**林：**上田さんはずっと釜ヶ崎での活動をされていながら、森村さんから突然「釜ヶ崎芸術大学として横浜トリエンナーレに出品して下さい」とオーダーが入り、おそらくその両方を経験されていると思うので、そのギャップも含めてぜひお話を。

**上田：**賛否両論、実はありました。私たちは喫茶店のふりをして毎日開いているこの場所のあり方そのものを展覧会という美術館の中に持って行くことはできません。ですから、ここに集まってきた物たちを持って行くことにしました。持って行って「何じゃ？これ」と言われてバカにされたら、私たちがバカにされるのは良しとしても、もしおじさんたちのことまでバカにされたらすごく嫌なことなので、迷いました。もう一つ、本当にばかれています、もしメチャクチャ当たってメチャクチャうけたらどうしよう、おじさんたちに会いにいろんな人たちが来ちゃったりしたらどうしよう、それでバランスが崩れておかしくなっちゃうとか、勝手な心配をいっぱいしていました。前者の方については悩み、考えました。私はおじさんたちの表現が好きです。空気を読まない感じとか、好き勝手な感じ。誰が何と言おうと私は好きだと言おうと思いました。なので、表に出しますと、腹を決めました。森村さんはそのための物語の舞台を用意して下さったと感じています。ですから、安心してそのままにおじさんたちとの日々を持って行きました。後者の心配は直後にはないのですが、いまになって少しひっかかっています。ともかく私は人と人のあるものを丁寧にみるのが好きだと思っていました、間に興味があるとずっと思っていたのですが、実はトリエンナーレの経験から、時にはそこを突き抜けてゆきたいということも同時に持っていることも発見しました。突き抜けて見たことのないものを見たいし、感じたいです。それで、もしかしたら表に出る、晒すという瞬間が時々あってもいいのではないかと考えています。トリエ

■

ンナーレはそういう意味では突き抜けてゆく時の1つのロケットみたいなものだったと思います。幸いなことにメディアからの評判も良く、いっぱい取材を受けてしまうことになりました。森村さんも私もメディアからいっぱい質問されました。実はヨコハマトリエンナーレからはあまりお金が足らなくて、おじさんたちと数十人で行きかかったものですから、300万円をクラウドファンディングで集めてしまいました。寄付までいただいたので、ちゃんと答えなくちゃと思って、質問にまじめに答えていました。けれど、だんだん違和感になっていきます。私たちは私たちの表現をしたかった。表現って誰のものか、聞いたかったわけです。私が答えてしまったらそれはちょっと違う。すごくジレンマがありました。途中から森村さんが釜芸に関する取材を断るようになったそうです。ヨコトリが終わった後、森村さんと私でそのことについて話をしました。しばらくしてから「釜ヶ崎芸術大学に大学院を作ろう、美学学会を作ろう」と提案いただきました。釜ヶ崎から、おじさんたちが自分のことばで美を語るような場を作ろうと。まさに私はそれがたくてやっていたことです。ヨコトリという1つの大仕事を経て、大学院、美学学会に繋がりました。やってみて、真剣に悩んで、というのを繰り返すのだなど今は思っています。

**藤井：**釜ヶ崎芸術大学大学院生で2015年にラジオと一緒に出ていただいた方、あのおっちゃんのことが強く印象に残っています。その時の句が本当に心に響いて、ちょっとご紹介したいと思います。「重陽に 帰れぬ故郷 ワンカップ」  
この「ワンカップ」が何とも言えません。この方今はどうされていますか。

**上田：**この方、またアル中に戻られて、釜芸に来られなくなりました。本当に人生何があるかわからないです。人生ですから波があるものですね。「福祉的なアプローチしているでしょ」と言われた時に「いえ、していないです」と言わないと辛いのは本当にこういうことです。そのおじさんが藤井さんをしびれさせた句を作ったけれど、また今表に出られないくらいアル中に戻ったりします。そういうものですね。でも私もそのおじさんも釜ヶ崎にいるし、出会い直す気持ちはあります。信じています。と言うのは「効果とか簡単に言わないでよ」って気持ちは時々ふと起こったりします。

**林：**逆にトリエンナーレ側からの話をすると、キュレーター・チームと事務局の方でも、釜ヶ崎芸術大学を出品作家と考えるのかとい

う議論は当然ありました。

**上田：**だいぶん心配されたみたいです。

**林：**はい。まず、どう紹介したらいいのか。アーティスト、アーティスト・コレクティブ、アーティスト集団みたいな感じで言うのか、いや、言わないだろうみたいな。また森村さんは展覧会を章立てにしてセクション分けしていたのですが、他のアーティストと一緒にあるセクションに入れてしまっていていいのかとか、いろんな議論があって。結果、映像では分りにくかったと思いますが、展示室と展示室の間のような、ある種の自由な空間に展示していただいた。だから物理的には、いわゆるファインアートと呼ばれているものから距離を取った展示にはなったのですが、来場者にしてみたら、それは1つの展覧会のなかのことであって、体験としては同じ鑑賞体験ですよ。実際に釜ヶ崎のおじさんたちが作った細かな物やお習字には見入っている方がたくさんいらっしゃって……、エネルギーがあそこに渦巻いていました。だからそれを実際目の当たりにして最終的には良かったと思うのですが、企画当初はどういう風に扱えば……、扱うって言い方もちょっと失礼ですよ、どう接したらいいのかなどというのはあったし、後は炊き出しとか普通の展覧会ではあまりないイベントがあったので、そうした点も心配の種ではありました。でも多分、上田さんが先ほどロケットみたいなものだと仰いましたが、トリエンナーレ側にしても同様に、そういう異分子のようなものがあることで、新しい展覧会のあり方が考えられたのではないかなと思っています。

**藤井：**「異分子」というキーワードが出て来ました。そもそものコンセプトが「忘却」を中心にするということで、つつい私がイメージを重ねてしまう現象があります。今各地で様々な芸術祭が行われて、地域興しだなんだと百花繚乱ではありますが、地域の資源を掘り起こすとか、地域の歴史、記憶を明るみに出してそれをみんなで考えていこうとか、記録に残っているもの、記憶に残っているものを大切にしていこうというようなこと、それらはもちろん大事なことです。しかし森村さんは、それだけではなくて、もっと裏に消え去ったり追いやられている、声を出したくても出せなかった人たちの声の中に真実があるかもしれないという、その辺を見せるという意味で、釜ヶ崎芸術大学を入れるということをある意味突っ張られたという気がして、それが今回成功したのではないかなと思っているのですが、どうでしょうか。



**林：**おそらく森村さんの中では、アーティストとして作品を作るといふことと、一般社会から外れてしまったということ……、実際にはアーティストとして社会に関わっているのですが、もしかしたら自分はそこから離れてしまったのではないかという恐れとというか、不安とというか、そういったものが常にあるのかもしれませんが。すでにあの地位を得ていて、そう思う必要はないのではないかと、私はいつも思いますが、やはりそういう思いを常に心の中にお持ちのようで、アーティストを決める時にも「だめなアーティストを選んでください」と言われました。それで、「この人とかどうですか。ちょっとだめな感じで」と提案しても「それはだめなふりをしているからだめです。本当にだめじゃないとだめです」「ああるほど」と。そういった議論がありました。釜ヶ崎のみなさんにどこかご自身と重なる部分を見出していらっしゃるようにも思います。そもそも2007年に森村さんがレーニンの写真を撮影する時に釜ヶ崎の方たちに出演してもらっているのですが、それもおそらくそういったバックグラウンドがあったからじゃないかと思います。

**藤井：**ヨコハマトリエンナーレに特化したお話になってしまいました。今日ご登壇いただいた先生方も60年代、70年代の方ばかりで、横浜トリエンナーレのアーティストも同じような年齢の方が多かったようにお見受けします。その辺は、そういうイメージがあったわけではなくて、たまたまそうなったという、そういう時代を生きて来た人がちょうど合っていたということなののでしょうか。

**林：**そうですね、森村さんが1951年生まれ、今65歳なのですが、学生時代にご自身が影響を受けたとか憧れたとか、そういう森村さんにとってリアルなものが中心になっていたと思うので、多少年代は固まったのかもしれませんが、でも、先ほどもお話ししましたが、作家選定におけるバランスについては毅然とした態度で突っばねていらっしゃったので、自分がよしとするアートであればどういう人でも構わないということはあったと思います。また釜ヶ崎芸術大学をはじめ、「ヨコハマトリエンナーレ2014」での紹介を機に、何人ものアーティストがその後、目覚ましい活躍を遂げているのを、森村さんは大変喜んでいらっしゃいます。

**藤井：**ありがとうございます。

日下さん、つい先ほどまで、能勢電鉄の方がおられました。日下さんの表現を、能勢電鉄沿線をアートで紡ぐ『のせでんアートライン2015』で目にしていたわけですが、「目から鱗落ちました。本当に

■

おもしろかったです。一緒にアホになりたいと思います。」くらいの勢いで言って帰られました。現代社会において、突き破れない壁があったりそれを表現を通して繋いでいこうという取り組み、これはファインアートとはアプローチが違うと思うのですが、両面を地域の中に入って行く時には持たなければ、そのバランスを上手に取りながらやっていかなければ、片手落ちになるという話もあります。しかし一方で、アートはアートとして突き詰めなければならず、それを提示することも大事だという考え方もあります。その中で、日下さんの立ち位置はどこにあるのでしょうか。ご教示いただけないでしょうか。

**日下：**えーとね、假奈代さんがヨコハマトリエンナーレの時に答えるのを止めたと言ったと思うのですが、アートは問題提起、デザインは解決ですよ。みんなアートや地域に解決を求める傾向がある。要は問題があると気付いて解決するのは地元の人だったり住民であったりするべきであると思います。だから、僕はアートは気付きですが、ポスター展は1つの解決だったりしますね。だから、セルフ祭というものは自分が参加者になって自分の可能性とか自己の表現の可能性を気付くということです。さらにヨコハマトリエンナーレとか汗をかく方と大きな方と考えると、どちらかと言うとアートは2つの効用があると思います。1つは問題の提起と鑑賞して自分が感動する、もう一つは作ることによって変わっていくという2つのことがあって、僕たちは後者ですかね。作ることによって変わっていくという部分。自分たちが作ったもので人を感動させて変わらせることができたらいいのですが、まあそこまでのレベルはヨコハマトリエンナーレみたいにはないなと思いました。それなりでも効果はあるし、お金はなくてもできることだと思います。

**林：**横浜トリエンナーレも予算がないわけではないのですが、アーティストに使われるお金はじゅうぶんでないことも多いです。

**日下：**え、そうなんですか、まじっすか。へーあっそうか。会場は無料か。

**林：**何にお金が掛かっているかと言うと、やっぱり広告宣伝とか。

**日下：**あーなるほどね。

**林：**いろんなことを地域に仕込まないといけないとか。巡回バスを



■

出したりとか。本来お金を掛けなければいけないアートに関しては結構、節約をしています。

**日下：**あっそうなんですか。へえー

**林：**だから、そういう意味では、本質的な一番コアな部分というのは、みなさんが想像されていることと変わらないのじゃないかなという気がします。

**日下：**そうですね。なんか直島とかも、アーティストに宿泊させてただで作品作らせると聞いたことがありますね。何のはなしでしたっけ。能勢電の話か。能勢電鉄がスポンサーでやったのですが、あの時におもしろかったのが、コンセプトが「己を祭れ」だったのですが、能勢電社長がUFOを呼ぶと「ウォー」と大声で叫びました。要はみんなで叫ぼうと言うと社長が叫んでるわとこれは成功したなと思いましたが。僕らのプロジェクトによって大の社長がUFO呼んでるわとちょっと笑えましたが、そういった地域を変えていくというのはいいことだなと思います。セルフ祭というのはシステムとしてはいろんな人が表現をして自分たちが己を祭って、自分たちを解放していくということです。だいたいほとんどが新世界でやっていました。能勢にそのシステムを持って行ったら意外と上手く行ったなと思いましたが。だから、なんですかね、あのそういう行為をどんどんやっていけるなと思います。

**藤井：**実は約束されていると社長から聞いたのですが、ダンスをするとか。役員全員が山の上でダンスをするとか。

**日下：**聞いているのかな。社長さんが宣言しはって「次のセルフ祭は社員みんなでスリラーを踊ります」って仰った。そう言って下さったこと自体が1つの息が合ったと思うのですが。そうそう、だから、1人でしゃべっているのも、みなさん思うことがあったら突っ込んで欲しいですけど、アートって自由だったり気持ち良かったり、寛容性があるように思います。だからちょっと行き詰まった地域がそれによって自由になったりハードルを突破できたりとか、そういう寛容があることの方が若者が住みたいなと思ったりすると思います。いかんせんアートを求める地域が不寛容だったりして、結構いろいろあるなと思います。そこがちょっと困ったところですね。

**大坪：**少しだけ話をさせていただきたいのですが。アートの中に尖

■

がったファインアートというものと、非常にベタなその辺のおっちゃんがやっているものがあります。どちらかと言うと、尖がったアートは刺激ですね。あっちこっちでやられているビエンナーレとかトリエンナーレそういうものですね、地域に対しての刺激だと思えます。そういう刺激を受けた側が変わって、それが地域に定着していくことが将来的には望ましいと思えます。例えば、活け花がアートで園芸が芸能だとすると、そういう意味では、アートではないですが、ドイツにカルスルーエという街がありまして、そこではバルコニーコンテストというのをやっています。どういうことかと言うとバルコニーにみんなお花を植えましょう。街のマルクトプラッツにお花屋さんがいっぱい出ています。苗や花を買って来て自分の家のバルコニーを皆が飾ります。市民が、どこのが一番きれいだと投票します。そういうことによって街を活性化して行く。これはファインアートではない普通のことであるのだけれど、街はきれいになって行くし、それによって街に住んでいる人は気持ちよくなる、そんなことも僕は必要なのではないかなと思います。いかがでしょうか。

**日下：**まあ難しいですけど、アートというかどうか分からないですが、アイデアと言えばアイデアですしね。だからちょっと難しいですね。もちろんやっていいことだと思いますが、アートの定義とかいろいろ考たくなるようなお話でございますね。思ったのですが、アートというのがビエンナーレもそうだと思いますが、刺激と言いましたが、刺激は映画も刺激じゃないですか。だいたいみんなその時はメッチャ感動して、何かやろうとしますが、3日経ったら忘れます。でも假奈代さんのように続けていくことです。僕らも後輩ながらいちようそこに来て居座ってちょっとずつやっている。刺激と継続というところがすごくあると思っていて、すごい感動が欲しければ、映画でも小説でもアートでもいいです。そこが、どうですかね、アートの問題提起というところから。

**林：**そうですね、今日シンポジウムが始まる前にもみなさんで話していたのですが、美術館がどういう存在であるべきかという考えはどんどん変わって来ています。例えば、昨今は、どんな展覧会をやっているか次第で美術館に行かれる方が多いと思います。つまり、美術館に行っているようで、実は展覧会に行っている。たまたま〇〇展をやっているから、〇〇美術館に行きましたということです。美術館は本来、作品を収集し保管する施設ですから、収蔵品があり、それらを展示するための常設展示室があると思いますが、大半の人



はそちらには行かないで展覧会だけを見て帰ってしまうというケースがほとんどです。それはいかがなものかという議論は美術館の内部でもあって、収蔵品をもっと見てもらうように工夫しなければいけないと考えています。なぜなら、自分たちの持ち物を見せるということ以上に、いつもそこにある美術作品であっても見るたびに違う発見があるよという、そこを理解してもらわないといけないからです。展覧会に行って新しい作品を見るのもいいのですが、前に見たことのある作品でも、その時には気づかなかったこんなおもしろさがあるということを知るのも美術の楽しみのひとつだと思うので、それとちょっと似ている話ではないかなと思います。

継続というキーワードが出ていましたけど、やはり体験なり鑑賞なりを持続していくことがすごく大事です。美術品は人間よりずっと長生きですから、今の私たちが評価できない作品を100年後の人たちが評価する可能性も大いにあります。そう言う意味では、美術は時間と非常に密接に結びついている存在だと思います。

**上田：**はい、あのヨコハマトリエンナーレに行った時に、美術館は死んだものを収蔵している、大事にしている場所だから釜芸みたい

**林：**美術館の人に言われたのですか。

**上田：**はい。

**林：**結構自虐的ですよ。

**上田：**アートって、本当にいろんな意味合いがあるし、別にアートが何かということ定義すること自体よりも、それを問い続けている方がいいぐらいに思っています。アートは何かと言われれば、今の活動を支えるために、私は「生きる技術」と考えたいです。私たちが常日頃いる人たちというのは、貧困や困難な状況にあったり、辛い過去があって顔を上げてなかなか生きていけないとか、そういう状況の人も多くいるので、例えばお金払って美術館へ行くというのも難しかったり、これまでの人生の中でそういうものを身近に捉えることができない環境にある人たちが多いわけですね。そういう人たちがアートと言う時に、これは恰好良くてねという話ではなくて、生きていくことの下支えになるようなこと、自分を表現した時にスツしたりとか、それを受けとめられて反応が返って来ることによって自分が生きていくことをくつきりさせるというようなこと、そ

■

それぞれの人が自分を心から捉える瞬間をいっぱい繋いでいくことで、息が楽になる。気難しかった人がすごくおもしろかったりとか、強面で嫌なことばかり言っていたのが、実は自分が排除されてきたことの裏返しで、心の奥に優しさを秘めていたことがわかるとか。私には生きられないような人生を生きて来た人たちが、こんなにも面白い人たちだったとわかることが、表されて、日々の中にあります。そんな風にアートを捉えているので、一般的にアートと言った時の捉え方と随分違うかもしれませんが、私にとってのアートは生きる技術ですと心に持ちながら活動しています。

**藤井：**上田さんの著書、皆さんぜひご一読ください。この中で、表現することがどうか、仕事は表現だとか、生きること自体が表現だと声高に言うことではなくて、お互いの存在を認めて大切にできる場を作るということを目指しておられます。そうした場を作り持続して行くことに力を注ぎたいと仰っていました。本当に私も同感で、それを心掛けていきたいなと思っています。

さて、ご来場の皆様にもお話をお伺いできればと思います。

**質問者①：**すみません。武庫川女子大学の岡谷と申します。今日は非常に興味深いお話ありがとうございました。私は今情報メディア学科という所におりまして、環境都市計画を学んでおりまして、堀江という街を調べていまして、昔の家具屋街だったのですが、今はアパレル街に変わっています。今回はアートで話したのですが、まあ堀江の事例でいくと住んでいる人がいるのですが、そこで商売している人が何とかしないといけないということで、自分が持っている土地と建物を活かしてアパレルの店を呼んで来たら街が生き返って来た。今日のお話しの中でアートが仕掛になってその土地に住む人がどう内発的に変えたいと思わせるかというところで、僕が感じたことはそこで商売している人がそういう問題意識を持って変えなきゃいけないのかなと気が付いた事例をまじまじと見ました。で、一方で堀江という街は今様変わりすることはできたのですが、数々の失敗をしています。ギャラリーもたくさんあります、けれども個人が個展をやっていますがアートの街とはなれませんでした。たくさんする失敗の中で上手く行った秘訣とはおそらく今日登壇されている方で、失敗談から成功する秘訣は何なのかということ、今日一番印象的に残ったのが、初めに踊る人ではなくて、その次のフォロワーが実はすごく重要なのだという話があって、関西にもアートとか美術館、ギャラリーたくさんあると思うのですが、若い年代の人たちがアートをやっていると思うのですが、いいフォロ

■

ワーを育てる秘訣は何なのか、今日お話を聞いていてすごく気になったので、もしアイデアがあればお聞かせ下さい。

**日下：**フォロワー、フォローできる場所を作るといことかな。新世界でいうとピカスペースという所で、みんなが盛り上がり「あれおもしろかったな」と友達になってまた何か関係になっていて。つながる場所があることかなと思います。なのでやっぱり打ち上げ花火じゃなくて継続することかなと思います。僕普通の仕事で街づくりとか活性化もやっているのですが、活性化がうまくいっているところって、いいゲストハウスとかカフェとかがあります、元気な街って。堀江なんて元はアメ村の倉庫街に女性の方が1人入ってカフェを造られて発展したところ。そんな場所にたまり場がある、秘密基地がある、そんなことが大事な気がします。

ちょっとお聞きしたいのですが、假奈代さん、フェスティバルゲートの時とだいぶん変わりましたか。そこを聞きたい。僕ちょっとフェスティバルゲートの時はまだ若すぎてあまり知らなかったのも、そこからの変異を教えて欲しいです。

**上田：**長くなりそうな話なのですが短くがんばります。4つのアートNPOがありました。ジャンルも違うし、使う専門用語も違うし、お金の集め方も違う、スタッフの働き方も違うという中で、町内会と称して月に1回集まっていました。特徴は、大人として話することだと思いました。フェスゲから追い出されるとなった時に、残りたい、となり、4つの団体が全部協力できたかというところではなく、中心になった団体は2つ。コロールームもその一つです。この建物をどうしたいか考えるさいに、この社会の中で私たちは消費者ではなく、主体として生きていきたいという気持ちがありました。大阪の街の中でフェスティバルゲートは特別な場所にあります。周りには近代化の澱が溜まったようなところ、再開発、差別偏見、いろんな地域の様相があります。そうした地域に隣接したフェスゲは実験的なものができる広さを持った建物じゃないかと提案しました。行政に対して税金を払っている私たちが「あんた達が決めたんではよ、行政の人たちがやるべきことではよ」ではなくて、そうした課題に参画して行こうとプランを書いたのです。私はそんなこと考えたのは生まれて初めてで、難しいことだったけれど、2年間真剣に考えました。結局追い出されて「別に行政と付き合わなくてもええよ」と言われているにも関わらず、しつこく対話していきましようという態度を取り続けました。立場が異なる人たちと話すテーブルを持つとか、立場が違うことを乗り越えて行こうという気持ちを

■

持ち続けるということが大事だと思います。私は現場を維持するだけでも大変で泣き言も多いのですが、一方で文化政策とか行政との関わり方なども、勉強する気持ちや関心を持つよう心がけています。現場とそういう場を行ったり来たりすることが大事かと思います。

**質問者①**：ありがとうございます。やはり日下さんの、その場所があれば変化が起きるといふ話と、そこで上田さんが仰るように立ち退いてもずっと考え続けるというエネルギーが、場所はどこか確保したとして最初に踊り続けてフォロワーが現れるまでそこに居続けて活動し続けられる秘訣というのは情熱ですか、どうでしょう。

**日下**：僕はただおもしろいからですけどね。会社でばっかり働いていたらおもしろくないと思います。いろんなジャンルの人がいるし、アホなことが言えるし。僕は全然行政は頼らないというかNPOじゃないです。そういう意味ではちゃんとしてない、多分収支計算とかできないし、僕もやった方がいいかなと思うのですが、やらなくていいわってなります。だからそこに尽きるのかな、楽しくなかったら僕は多分辞めるかやらない気がします。假奈代さんは楽しいからなのか、そこが気になります。僕は最初正直コッポルームさんがやっていることは福祉的なものだと思っていました。要はマザーテレサ的な、西成のマザーテレサだと思いましたが、假奈代さんは。そう思ったのですが、ちょっと教えて欲しいのですが、その辺ってどうですか。

**上田**：私は社会不適應です。本当にだめです。この仕事しかできないです。おかげさまでおもしろいですよ。若くて悩んでいて、自殺したいか思っていた10代の頃より今の方が楽しいです。

**日下**：楽しいってことが一番ってことですね。

**上田**：おもしろいねん。「飯のタネにしてん」くらいのそんな感じですよ。

**質問者①**：ありがとうございました。

**藤井**：ありがとうございました。もう一方くらいお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。ご近所から来られた方もおられますよね。ぜひ地域に普通に暮らしていて、アートがもしやって来るとしたらという想像でも結構です。

**質問者②**：今日の上田さんのお話しの中で参加されている中高年の

■

男性のお話し、お1人お1人の問わず語りと言いますか、お話しを聞けて中に「段ボールこんな暖かいものないんや」というお話しがって、先ほど上田さん、アートって生きる技術だと仰ったのですが、皆さんに段ボールがアートというような人に見せる以前に生きて行く最低限かもしれないですけど、釜ヶ崎というところで、そういう生活の中で人と接してことばを伝える機会を作られているということが本当に貴重な機会で、あの映像を今日初めてここで見る事ができたのですが、もっといろんな場面で生活している人に見ていただける機会があればなというふうに今日感じました。ありがとうございます。

**上田：**そんな風に言っただけでうれしいです。あの映像は公開を目指して再編集を何度も繰り返しています。この間オリンピックの始まる前のリオに行っ来てまして、英語字幕までつけて持ってきました。映画としてまだもう一歩で未完成な部分がありつつ、いろんな人に見てもらいたいと思っています。トリエンナーレの時もおじさん達を連れて行くのに、お金かかってしょうがなかったんです。いろんな所に行くとなんかおもしろい出会いがあることもわかっています。それで、交通費を節約するために映像で持って行こうと考えて作りました。公開を目指したいと思っています。

**林：**今みなさんの質問を聞いて思ったのですが、例えばトリエンナーレとかビエンナーレとか美術館とかの立場から考えると、つい美術が社会を変えていると思いがちなのですが、実際は当然ながら、社会も常に美術を変化させています。例えば、絵画作品はかつては教会や貴族の邸とか王宮とかにしかなかったものが、個人が絵を買えるようになった時代に手で運べるようなサイズになって、市場に流通するようになりました。その後、1970年代にインスタレーションという空間を使って作品にするという表現形式が登場し、ここ最近になると観客を巻き込むインタラクティブな作品が増えて来て、さらにそこにパフォーマンスが入って来て……、作品自体が形あるものというよりは、アーティストやアーティスト以外の人々が身体的な行為をすることで作品として成立するという、そういう傾向がますます強まって来ています。それはやはり物としてあるのではなく、一度しか見られない、その時にしか成立しないという形が社会に求められているから、美術作品がそういう風になってきたのではないのでしょうか。ちょっと話がずれているようですが、今私たちが話しているようなことの中にそういう部分が含まれているのではないかと思います。



**日下：**なんで地域がアートを求めるかということですよ。バブルの時は全く求めていないですよ、地域はね。だから確かにそうかもしれないですね。社会によって作品が変えられていくことは確かになと思いました。

**上田：**ココルームを始めたのは2003年で、社会が変わり始めていました。その時にアートで仕事をして行こうと思った時に、作品を売って行かないといけない。私は詩人なので詩集を売るとかそういうのがあるのですが、その時にアートの作品を買えたり、詩集を買うのはある種お金がないと買えない。資本主義の社会ですからそういうことですね。ところがついついお金がある人の方を向いて作品を作ってしまうことについての違和感が生まれました。元々神さまや王様のものであった芸術が人々のものになって、人々のものから今のこの社会状況の中ではお金のある人のものになり、移り変わっていった。その揺れながらまた社会が変わって行ったら、こうした考えもまた変わって行くのだろうなと思います。例えば戦争の時もそうですよね。戦争に参加するように芸術というのは加担してきたわけです。そうしたプロパガンダになったことへの反省とか考えたわけですね。最近メディアやアート界で自粛ムードがきついと感じます。私たちはこうしたことを考えてゆく時代に来たのではないかと思います。

**藤井：**最後にひとつお願いします。

**質問者③：**すいません、途中からの参加で失礼します。本学の附属図書館にあります川崎と申します。今日は最初から伺えず残念です。あのトークセッションからお聞きしたのですが、数年前から MLA 連携ということばがありまして、ミュージアム、ライブラリー、アートで連携し合っていくことが大切だと言われていながらなかなか実現ができていません。今日うちの図書館で卒業生で絵本作家の方のワークショップをしていたので遅れて来たのですが、途中から伺っているながらやはりいろんな方を対象に文化的な発信をして行くことでは共通部分があると思いついて聞いていたのですが、会場の場の提供という点でいけば図書館は非常に活動の場として拠点としてお役に立てることがあるのではないかなと思いついて伺いました。そういう視点で今後もし何か連携して行くという立場で行くならばこういう図書館って役立っていけると思うけどというような新たな視点があればぜひお聞かせ頂ければなと思いました。





**上田：**釜ヶ崎のおじさん達は図書館大好きです。リオに行った時にリオのホームレスの人たちと合唱したのですが、最後の発表会場が図書館のホールでした。そこにリオの福祉局の人やプリティッシュ・カウンシルの人とか、白色の人たちですね。ホームレスの人は有色の人が多いますが、一緒になって最後ハグし合っていました。図書館の教育担当の人も参加していました。これは4年かけたプロジェクトだったのですが、いろんなセクターの人が時間をかけて関わり、最後は図書館のホールだったというのもすごく象徴的だと思いました。美術館の人ももちろん関わっていました。連携していくのは難しいけどやっぱり大事なことだと思っています。

**日下：**図書というか文学が持っている力をどうアピールして行くかが図書館の役割だと思います。僕はそこは美術館の仕事は美術の力をきちんと伝えることだと思いますが、そういうことをやって欲しいかなと思います。いろんなことができる今。そういう風に思いますね。

**林：**今、アートがいろんな分野から必要とされていると私は思っています。美術と関わりのある組織だけではなく、本当にいろんな所から必要とされています。それはなぜかという、多分アートというよりクリエイティブと言い換えた方がいいのですが、これから生きて行く人間に必要なのはおそらく2つの“そうぞう”力です。イマジネーション＝想像力とクリエイトするための創造力。これら2つがこれからの人間に役立つものとなり、それゆえに、アートを理解する能力、あるいはアートを生み出す能力がおそらく必要になって来るのではないのでしょうか。私はキュレーターですが、キュレーターは美術大学を出て、作品を作れたりするんだろうと誤解されたりしますが、私は絵を描いたり作品を作ったりはできない人間です。そこで何ができるかというと、2つの“そうぞう”力のうちの想像力、あるいはクリエイトするといっても作品を作るのではなく展覧会を作る創造力だと思います。また、個人的な話ですが、私の母が私設の児童図書館をやっています。幼い時から本が大好きでたくさんの本を読む機会がありました。本を読むという行為はアートを見る以上に2つの“そうぞう”力を養ってくれる大きなソースだと思います。実際、図書館を使って作品を作るアーティストもいます。『華氏451度』の話をしました。たしかベルギーのアーティストで、図書館である人に本を1冊選んでもらい、その人がその本を丸ごと暗記する。暗記するだけでなく、時々それを自分なり

■

に改編してもいいです。こうして自分が語り部に、つまり生きている本になって、来館者にその物語を伝えるという作品を手がけているアーティストがいます。他にも、自分の家にあるのに1度も読んだことのない本を持って来てもらって図書館にし、そこを宿のようにして、眠れない夜に本を読んでもらうという作品を発表しているアーティストもいたり……。図書館や本をテーマに作品を作るアーティストは結構います。その理由は多分、今申し上げた2つの“そうぞう”力を養ってくれるからではないでしょうか。アートと図書館が連携する可能性はじゅうぶんあると思います。

**日下：**図書館の話で思い出したのですが、僕本が好きで、僕本によって人生変えられたことがあります。さっきも假奈代さんの話してホームレスのおっちゃんがドストエフスキーの「悪霊」と「カラマーゾフの兄弟」と答えるってすごいなと思って、実は「カラマーゾフの兄弟」も「悪霊」も難しいですよ。正直失礼な話かもしれないですけど、ホームレスの方が文学に素養があるかどうか、そういうのってすごい話です。ある自治体の図書館の相談を受けたのですが同じ市内でも地域性の違いが顕著で、図書館の蔵書が全然違う。読書人口にも差がある。でも、本によって何とかしようとその人に合った本やその人に合ったものを提案してくれるといいし、ドストエフスキーのおっちゃんみたいにあんな人が出て来るのではないかなと思って。僕の友達も新世界で遊ぶのですが、正直高卒が多いです。メッチャ本好きですね。結構難しい本を読んでいるし、あれっておもしろいなと思ったのが、国語で習う読書でない本の接し方みたいなものを教えて欲しいなと思いますね。

**質問者③：**ありがとうございました。

**藤井：**そろそろ、いい時間になって来ました。もうないでしょうか。お手が挙がりました。所長いいですか。もう一方。

**森田：**もうぜひ、大歓迎です。

**質問者④：**西宮市民で、ボランティア活動をやっています。いろんな市民講座を企画運営するボランティアを退職後やっています。今日上田さんの話や日下さんの話はものすごく楽しくて私にとってはエキサイティングな話を聞かせてもらった感じがします。そこで上田さん、日下さんにお聞きしたいのですが、今やっていらっしゃる活動をですね、ボランティア的精神でやっているとお考えでしょう

か。それとも例えば上田さんの場合にはそういう釜ヶ崎での活動が自分の詩作作りの何らかのヒントとか何か新しい作品作りに通じるのではないかという気持ちもお持ちでやっていらっしゃるのか、また日下さんの場合はですね、まあ電通でお仕事されているわけですから、そういう自分の仕事との絡みと言いますか何か新しいヒントと言いますか、そういう街づくりに関わることによって自分の仕事のコピー作成とかそういう何か自分の仕事にも関わるという気持ちでやっていらっしゃるのか、全くそういうことは関係なくこれはまさにボランティアと割り切ってというか、1つに決めてやっていらっしゃるのかそこをちょっとお聞かせ願いたいと思います。

**上田：**私、ボランティアだと思ってないですね。釜ヶ崎での活動は私にとっては詩だと思っています。事務をしたり事業をするのも私にとっては詩です。また、スタッフにとっては違うと思います。できたらスタッフにとって、その人の人生の何かとしてやってもらいたいと思っていますが、それが通じているか通じていないか、人によって事情やグラデーションがあるので難しいです。いまはお金になっていないことをやっているのですが、ボランティアでやっているではありません。人は1人で生きられませんよね。おぎゃあって生まれて誰かがお世話してくれていないと生きていけないわけですから、決して1人で生まれて生きてわけではないと思います。どうやって関わり合いながら生きてゆくのかという、ただの実践に過ぎないと思っています。集中するために仕事にしています。釜ヶ崎の経験は私にとって詩ですが、ことばの作品になっていないのは、まだ私の技量が足りないからです。でも焦っていません。経験を毎日積みながら、もうちょっと年を取ってからしっかり詩作しようと思っています。

**日下：**僕はね最初、ボランティアをするつもりはなかったのですが、全然仕事と別に思ったのですが、一緒になってしまいました。だから今ごった煮ですね。正直プライベートで写真をやっています。広告の仕事が面倒くさいことが多いんですよ。おもしろいと思って自分の表現だと誰の干渉もないから好き勝手作れるわけですからずっとずっとやって憂さ晴らししてたのですが、まあ急にセルフ祭に呼ばれて逆に会社の人間40人ほど動かしましたからね。商店街のポスター展ということで、あれなんかも自分のフィールドに電通という会社を持って来た感じなので今は本当にそこから広告という力、地域限定の仕事メチャクチャ増えていて、後プライベートで知り合った子に三戸なつめのPVの仕事をお願いするとか、いい意味

■

で公私混同ができています。僕自身の問題意識があって、アートと広告というちょっと広告の方が若干下というか正直広告というのはまあお金があるけどつまらない表現よねと思われがちで実際そうだと思います。でも僕は広告のコピーライターとして広告界で色々賞とか獲ったりしてもこれを世の中に出てもおもしろくないとちゃうかなとか、だからストリートに出て来て表現したかった。どうなんやろ人のフィールドでやったら、他の奴もやれと思っていますよね。小さい広告の中で賞とかもらって「やったー」とか言っているのではなくて「出て行け」と思っていて、路上に出て表現してみたかったと正直あって、そうするとおもしろいですよね。「おーそう来るか」とか逆に僕の表現の幅も広がったしそれこそ釜ヶ崎のおっちゃんと仲良くなったり、UFOを呼ぶバンドをやったり、なんか訳がわからないですが、いい意味で、一番最初に言ったのですが、広告とアートの間を行き来しています。アートだけではなく逆にアーティストの方でいうとずっとアートやっている子は視野が狭いタイプの人もあるし、そういう意味では僕は両方足を突っ込めていいなって。僕ね、片一方の足しか突っ込めない理由分って来ました、てんびん座なのでバランスを取ろうとするんですよね。バランスを取ってやって行こうかなと思います。

**質問者④：**では日下さんもボランティアではないのですね。

**日下：**えーとね、だから、元々ボランティアかどうかわからないですが、震災後社会を良くして行かなアカンという使命は持っています。それは正直持っていて、こんな時間帯にまじめな話になってしまうのですが、旅行とか結構行っていて、その時に世界を見ると全くもって貧しい国とかいっぱいあります。日本は何でこんなしょうもないことしているのかなというのがあって、もっと社会を良くしなければならぬと思っていて、広告なんていらんもん売ってるわけじゃないですか、無駄なもの。やりながらなんか俺あんまりいいことしてないなという思いがあって、片や実は広告の力で社会を良くはなんぼでもあります。広告の力で社会を良くしたい。金になるかわからないけど思っていて、それがだんだん出来始めているというのが正直なところ。だからボランティアと言ったらおかしいですけど、ミッションという社会的使命みたいなものはあります。とはいえ、社会を良くしたいけど、つまらないのは嫌で、難しいですけど、おもしろく世の中を良くして行きたいと思っています。広告で言うと潮流でカンヌ広告祭という世界的な広告の祭があって、その広告祭でもソーシャルグッドと言い始めました。社会に良くな

■

いとダメだと。それに反対する人ももちろんいます。要は広告のアイデアで世の中を良くしていく、コミュニケーションで世の中をもっと良くしていくのは、根本アートと変わらないなど。問題を解決するところなるよと伝えるということなので、コミュニケーションの力ということです。いい意味で一緒になって来ているし、逆にソーシャルグッドということが言われ始めているということは、世界自体がバットなことに向かっていると世界的に思っているのではないかな。今もトランプさんもそうだし、地域もそうですし、だんだんダウンして行く。特に関西の話で言うと関西は課題先進国と言われて、東京はまだお金があってオリンピックもありますし。関西は経済が下火になって来て、企業も出て行っていて、地域も高齢化が進み、釜ヶ崎もそうだと思います。そういう時は何か今までの手法では解決できなくなっている、アートの力を求めようという機運が多くなっているからこのテーマじゃないけど、地域とアートが近づいているのではないかなと思います。ありがとうございました。

**藤井：**ありがとうございました。まだまだ話は尽きないところでございますし、地域とアートと言うことを語り始めると本当に課題が山積みで終わらなくなるというのが現状です。ただ、今日貴重なご意見を伺い、またいろんなお話をお聞きすることができました。これもまたまとめて記録集となってまた皆様のお手元にお届けすることになると思います。そこでは記録だけに止めず、今日のお話を踏まえて今後の課題と展望にまで繋げられればと考えております。そうしましたら総合同司会に譲ります。

**松本：**先生方、本当にありがとうございました。長時間にわたりまして非常に熱心な深い討議をありがとうございました。地域を変えろという、生まれ変わるということと同時に、アートのあり方、そして生き方自身についても問題を投じていただいて、非常に遊び心溢れるバイタリティーを感じさせていただきました。今一度登壇者そして講演の先生方に今一度大きな拍手をいただければと思います。

それではこれを持ちましてシンポジウムを閉会させていただきたいと思います。大変恐れ入りますが、アンケートへのご協力よろしくお願いたします。受付付近にごございます回収箱の方に、入館証と共に回収させていただいておりますので、よろしくお願いたします。どうぞお気を付けてお帰り下さいませ。ありがとうございました。

# 3

## 総括

### 濃い口アートのシンポジウムを終えて…

藤井 達 矢

「街をアートで遊ぶ—地域が生まれ変わる—」と題して、社会と密接に結びついたアートの最前線で活躍される3人にご講演をいただき、その後ディスカッションを行いました。人々の日常がある街、それは美術館などの隔離されたホワイトキューブではない。そこで正に今を生きる人間の悲哀渦巻く社会課題と直面し、生々しくさえあるアートの現実を目の当たりにしました。興味深い話は尽きることなく、ついに時間切れとなってしまった感があります。

アートを介して、アートがきっかけとなって地域がどのように変化し、また今後の可能性としてはどのようなことが考えられるのか。アートの夢を追うだけでは机上の空論に終わりがかねない。そこで、指定討論者として本学の大坪明教育研究社会連携推進室長を加え、全容を俯瞰し分析し、ディスカッションを通して特に日本のアートと社会の関係性に孕む課題を明らかにした上でその可能性にも言及できればと考えました。しかしやはり現実社会と向き合うアートを捉えようとしたときに、その諸相、切り口があまりにも多すぎて、当日の時間内では咀嚼がままならず消化不良を起こしたまま閉会となりました。

その後記録編集にあたり講演とディスカッションを読み返しながら、改めて課題の大きさを認識するわけですが、その中でご来場の方々から大変貴重なご意見ご感想を賜りました。ひとことで「アート」といっても様々な捉え方があり、それは勿論アーティスト同士でも意見の対立も起こる部分ではありますが、そんなアートが社会の中に入り込む時、また社会がアートを受け入れようとする時、それを実践するファシリテーターのセンスとスキルが問われることとなります。ご来場の方々の知見からも課題解決の糸口を見出すヒントを頂きましたこと、心より御礼申し上げます。

こうした経緯を踏まえて、改めて実践者の3人から簡潔に課題を

■

整理し今後の展望も含めて玉稿を頂きました。そして大坪室長による分析と評価をもってまとめとさせていただきます。地域アートが花盛りで玉石混交の昨今、その意義が問われています。常に多角的な視点からの検証と評価が必須ではありますが、アートでしか成し得ないコトがあると、私は信じたいのです。

### まちでつながる、ことの深さに、アートは関わる

上 田 假奈代

シンポジウムでお話してから数ヶ月経ち、わたしの現場である大阪市西成区・通称釜ヶ崎はますます変化している。震災などでなく、これほどまでにまちが急変することは珍しいことであろう。大きなリゾートホテルや地下鉄の駅ができることが発表され、また土地の値段は数倍あがった。空き家に貼られた管理会社の名前がめまぐるしく変わる。雰囲気異なる新しくスタイリッシュなホテルや飲食店が増えた。

ジェントリフィケーション（浄化）にわたしたちの活動が加担したと言われる向きもある。つまり、これまで関心のなかった世間の人々にこの街に関心を向けさせ実際に足を踏み入れる経験をさせた、と。わたしはそれほど影響力のある活動ではないと述べるが、それまで地域には、アートを切り口とした動きはなかったのは事実で、ある種画期的ともいえるようだ。釜ヶ崎の商店街のはしっこで喫茶店のふりをして、ヨコハマトリエンナーレに「釜ヶ崎芸術大学」が出場したことも、確かにこれまでなかったことだ。しかし、ジェントリフィケーションが浄化という訳を持つならば、わたしたちが行っていることは浄化というよりは、出会うということだと考える。地域のおじさんたちと地域外の人々が出会い、誰も代わりのできない一度きりの人生の深淵さにそっと触れる。

社会は変わる。まちは変わる。流れる水がとまることのないように。その流れのなかで、人は毎日を生きて。いまそこにある日々の周縁には自分とは異なる日々を生きている人々がいる。思い馳せることは難しい。けれど、たった一度でも出会って、声を聴いたり、絵を描いたり、いっしょに踊ったりしたら。さらに、ここで付け加えたいのは、噛み合わなさ、齟齬や不和といったハレーションも包み隠さず同時に起きるところも含めて、こころの細胞は覚えているかもしれない、と思っている。多様性とともにいるということは、いきなりみんな笑顔で、なんてありえないからだ。要するに、ありのままに、出会いを紡ごうとして活動している。いわゆるキレイゴ



トや正義のような感覚、上手なお金儲けでもなく活動しているのが、アートでまちに関わることの意味があると考えます。昨今、アートプロジェクトがまちでつながる、ということに重きをおくのは、アートで関わるとは、生きることに関わる深さなのだと思う。

## 街という重荷と遊び場

日 下 慶 太

アートによる街おこしにずっと違和感を感じている。自分でそういうことをしながらもずっと感じている。アートとは元来自由なものである。社会のくびきから外れ、因習や伝統やしがらみやいろんなものから一番自由であるべきものであるし、そうあって欲しい。だからそ「町おこし」という責務を背負わせるのはアートとは反するように思っていた。本当のアーティストとはそんな責任感から無縁でひとり、ただ黙々と作品を作り続けているのではないだろうか。では、なぜ、アートと街が近づくのか。一つは講演で触れたように、行き詰まった地域や自治体が突破口を求めて街の方からアートに近づいている。昨今のブームであるアート・イン・レジデンスや、アート・イベント、芸術祭にはそういった面を強く感じる。何か、大きな変化のきっかけを地域が欲しているように思う。アートに魔法をかけられたいのだろう。

では、講演であまり触れられていなかったところであるが、アーティストはなぜ街に近づくのか。アーティストが街でただ遊びたいからだ。街で作品を作りたいからだ。街の人と作品を作りたいからだ。四角いキャンパスに書くのではなく、美術館に展示するのではなく、町で絵を描き、町で展示をして、様々な人と関わり、アートに関心がない、関係がない人を巻き込みたい。アトリエやギャラリーで閉じこもっていても味わえないものを街が提供してくれる。そんな遊びの延長である時にアートは上手に街に作用する。街や地域の問題を提起し、地域の人々を目覚めさせ、何か大きな変化のきっかけとなりうる。しかしながらアーティストに解決までを求めては機能不全に陥る。解決を求めるなら町はそれなりのお金、時間、場所を提供しなくてはならない。解決を望むのであれば、それは広告であったり、コンサルティングであったり、マスメディアであったり、すぐれた行政手腕といった領域の方が得意とするところかもしれない。

街がアートに求めつつも、求めすぎないこと。アートが徹底的に街で遊ぶこと。それが街とアートのいい関係なのかもしれないし、



それを立証するためにもぼくは新世界で遊び続けようと思う。

## アート・人・社会の未来

林 寿 美

「ヨコハマトリエンナーレ 2014」からちょうど3年が経ち、この夏、第6回目の横浜トリエンナーレが開催される。タイトルは「島と星座とガラパゴス」。インターネットやSNSの急速な発展により、世界のどこにいても情報の即時共有が可能となったものの、その利便性と反比例するかのようになり、人々は自分の周辺世界に閉じこもり、行動範囲はますます狭くなっている。ガラパゴス化は、なにも島国・日本だけの問題ではない。

そうした時代において、アートと街、人あるいは社会はどのような関係を結ぶことができるのだろうか。現代美術においては、パフォーマンスをはじめ観客の積極的関与を促すインタラクティブな作品が増える傾向にあるが、どうすれば人々をスマホやパソコンから引き離し、生きたアートに対峙してもらえるのだろうか。情報を操作して流行を生み出すことは以前と比べて格段にたやすくなったものの、本質にふれないままの情報では大衆を誘導することしかできず、アートはただむなしく消費されて終わってしまうことも少なくない。とはいえ、考えないことに慣れた頭には、作品は難解さを匂わせただけでたちまち敬遠されてしまう。

1980年代の半ばから徐々に、アートが、美術館やギャラリーの閉鎖的な空間から外に出ていくようになり、ビエンナーレやトリエンナーレと呼ばれる芸術祭やアート・プロジェクトが各地で盛んに行われるようになった。そういう意味で、アートは街にじゅうぶん進出したといえるだろう。だがそれゆえに、作品側には街や自然と異なる存在としての強度が、一方見る側には、それを見分ける目とその芸術性を咀嚼する力が問われてくるのである。アートの価値を美術の専門家や美術館のような権威が決める時代は終わり、その街を訪れる、あるいはそこに暮らす人ひとりひとりがもつ物差しによって、アートの意義がはかられるような未来が、案外すぐそこまで来ているのかもしれない。あなたの街で人とアートがともに育ち、想像力と創造性にあふれるコミュニティを形成するのか、それともアートと関わりのない無難な暮らしをおくるのかは、あなた自身に委ねられている。

## 三者の発表と追加文から見えてくるもの

大 坪 明

**上田氏：**活動の地盤である釜ヶ崎が、このところ大きく変化している。大資本の進出や地下鉄の駅の開設の発表で、地価が上昇し、スタイリッシュなホテルや飲食店が増加した。私たちの活動がジェントリフィケーション（浄化）に加担したという説もある。しかし、私たちの活動は「出会うこと」、ありのままの出会いを紡いでいる。キレイゴトや正義、上手な金儲けではない活動が、アートでまちに関わる意義だと思う。

**日下氏：**アートに「街おこし」の責任を負わせることに違和感を感じている。本当のアーティストは、その様な責任感から無縁で、黙々と作品を作り続けているはず。行き詰まった地域が、突破口を求めてアートに近づいている。アーティストが街に近づく理由は、アーティストが街と遊びたい、街の人と作品を創りたいからだ。アートに無関心・無関係な人も巻き込みたい。その様な「遊び」の延長として、アートは上手く街に作用する。アートは人々を目覚めさせ、変化の契機を作ることはできるが、アートに解決まで求めると機能不全に陥る。

**林氏：**インターネットや SNS の急速な発達で、世界中で情報の即時共有が可能になったが、人々の行動範囲は一層狭くなっている。現代美術では、パフォーマンスをはじめ観客の積極関与を促すインタラクティブな作品が増加したが、アートが虚しく消費されるだけに終わることも多い。どうすれば、人々に生きたアートと対峙してもらえるか。アートは閉鎖空間から外に出て、十分街に進出した。それ故、作品には街や自然と異なる存在としての強度、観る側にそれを見分ける目・芸術性を咀嚼する力が問われる。街の訪問者や居住者各自が持つ物差しでアートの意義を量る未来が来ている。

上記三者の言説からは、「アートの強度」という言い方も含まれてはいるが、一見アートだと気づかれない様な作品が街に溶け込み、人々がそれに触れる、それと触れ合うことで、そこに驚きや感動、あるいは作品の変容といった「新しい何か」が生まれること自体が作品であるというインタラクティブ性が、「街をアートで遊ぶ」意義だと読み取ることができる。現代アートからすると、その通りだろう。そしていみじくも日下氏が言うように、「アートは人々を



目覚めさせ、変化の契機を作ることはできるが、アートに解決まで求めると機能不全に陥る」のだ。その意味では「アート」に対する、アーティスト側の思惑と、地域や行政側の思惑がかなり異なる。地域や行政側は「アート」に「人寄せパンダ」になって欲しい、「アート」をダシに人が集まってくれば、とりあえずは成功なのである。人口が減少し、人の動きが少なくなっているところに人が来れば、「街が変わった」と言うことができる。しかし、その様なアートの誘致で本当に「街は変わる」のだろうか。

いわゆる「観光都市」と言われる街は、恒常的に観光客がその街に落としてくれるお金で、消費や雇用・物流といった経済が回る。しかし、一過性のアートイベントは、ピエンナーレにしる、トリエンナーレにしる、2年ないし3年のサイクルで、しかもイベントが開催される期間だけしか、大量の観光客の誘致は望めない。更に、そのイベントを支える裏方の仕事は、当該期間だけではなく準備期間が長いので、疲弊度が大きいと考えられる。従って、このようなアートイベントは、その街や地域を広く世に知らしめる手立て、あるいは「地域が生まれ変わる」契機となることはあっても、それだけで恒常的に「地域が変わる」ことは困難なのではないだろうか。

恒常的な地域の変化は、その地域に定着する人々に変化が生まれることで起こり易い。しかもそれは、内側から起こることが望ましいだろう。外部資本や外部の人々が入ってきて、地域が変わることはよくあるが、それは結局、元から居た人たちが駆逐されることに繋がり易い。現在釜ヶ崎で起こっているスタイリッシュなホテルや飲食店の出現という現象は、正にそれだろう。同様な例にベトナムのホイアンが挙げられる。この町はランタン・フェスティバルで有名だが、ベトナム戦争の被害も余りなく、1999年に旧市街が世界遺産に登録された。その時点の観光客数は年間16万人程度だったが、2016年1月～9月で33百万人（年間換算で4.4百万人）。結果として、旧市街の建物はその大半が観光客目当ての土産物店、宿泊施設、飲食施設等になってしまった。同時に観光収入は、2016年1月～9月で1億2百70万ドル（年間換算で1億3千7百万ドル）と、1999年の約3百万ドルの40倍以上になった。しかしユネスコの報告書によると、同市としての観光収入が大幅に増加し、貧困世帯の数は減少したが、一方で、物価や家賃が上昇し、生活費が増大していることも報告されている。静かだった田舎町は、世界遺産登録と同時に、世界中から観光客が押し寄せて大きく変化した。恐らく同町の外からの資本や人々も参加して、店舗や宿泊施設が運営されているのだろうが、従前住民の一部を彼らが駆逐したことになる。また、観光収入に浴さない従前からの住民には、物価上昇は痛手に



違うないだろう。

それに対して、新世界の商店主達のポスターは、地元商店の人達が面白がって実行している様なので、そのポスターが今後どのようなモノに変化しようとも、彼ら自身の活動として持続させることで、街が内側から変わることが期待できる。そして、同様な変化が各地で起こるには、地元の人達をいかに「乗せ」て、面白がらせるか、楽しませるかが肝要なのであろう。その意味では、アートとは言えない従前からの「芸能」や「民芸」を、街の内側から「楽しんで」再興させることも、「街を変える」には大事だと思われる。「カラオケ」が芸能かどうかは判らないが、かつてあった天王寺公園のカラオケで歌っていた人々も、街角のストリートミュージシャンの一種と考えることで、街を活性化させる要素の一つに組み込むこともできたのではないだろうか。それが、新世界や釜ヶ崎で再興されると、大阪の観光要素になるかもしれないと思っている。その様な街や地域での内からの「楽しみ」が広がることで、街に好ましい変化が起こるのではないだろうか。上田氏の活動は、その様な萌芽だと、期待することができる。

# PROFILE

## ■ シンポジウム講師ご紹介 ■

### 講師プロフィール

#### ●上田 假奈代 /UEDA Kanayo

1969年生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめ。92年から詩のワークショップを手がける。01年「詩業家宣言」を行い、さまざまなワークショップメソッドを開発し、全国で活動。03年「コロールームをたちあげ「表現と自律と仕事と社会」をテーマに社会と表現の関わりをさぐる。08年から西成区(通称・釜ヶ崎)で喫茶店のふりをしている。「ヨコハマトリエンナーレ 2014」に釜ヶ崎芸術大学として参加。詩写真集「うた」、「このころのたねとして～記憶と社会をつなぐアートプロジェクト」の共著、「釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、コロールーム」(フィルムアート社)など。大阪市立大学都市研究プラザ研究員。2014年度 文化庁芸術選奨文部科学大臣(芸術振興) 新人賞。

#### ●日下 慶太 /KUSAKA Keita

1976年生まれ。コピーライター。株式会社電通関西支社CRプランニング局所属。ロシアやアフガニスタンなど、世界を放浪しながら電通に入社。コピーライターとして勤務する傍ら、写真家、執筆家、大阪・セルフ祭の顧問として活動をしている。ポスターで街を活性化する「商店街ポスター展」を仕掛け、佐治敬三賞、広告電通賞、「広告業界の若手が選ぶコミュニケーション大賞」優秀賞など、その他、TCC最高新人賞、朝日広告賞、ゆきのまち幻想文学賞などを受賞。都築響一氏編集「ROADSIDERS' weekly」で写真家として連載中。

<http://www.keitata.com/keitata/keitata/home.html>

[http://www.lifehacker.jp/2014/11/141130self\\_festival.html](http://www.lifehacker.jp/2014/11/141130self_festival.html)

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20150207-00000001-wordleafv-127>

#### ●林 寿美 /HAYASHI Sumi

1967年神戸生まれ。国際基督教大学教養学部卒業後、1989年より川村記念美術館勤務(現・DIC川村記念美術館)。同館で企画した展覧会に「なぜ、これがアートなの?」(1998)、「眠り/夢/覚醒」(2002)、「ロバート・ライマン」(2004)、「ゲルハルト・リヒター」(2005)、「マーク・ロスコ」(2009)など。2010年「第14回アジア・アート・ビエンナーレ・バンガラデシュ」日本コミッショナー。2012年に同館を退職後、「ヨコハマトリエンナーレ 2014」のキュレーターを務めるほか、内外のアートプロジェクトに携わる。翻訳書に「ジョゼフ・コーネル 箱の中のユートピア」(2011年白水社、共訳)。

#### ●大坪 明 /OTSUBO Akira

昭和 23年(1948年)生まれ。大阪市立大学大学院工学研究科修士課程修了後、(株)アール・アイ・エーに入社。集合住宅団地や再開発ビル等の設計に従事。平成9(1997)年より武庫川女子大学非常勤講師。平成 18(2006)年(株)アール・アイ・エー退社。同年武庫川女子大学教授。平成 28(2016)年武庫川女子大学退職、同大学特任教授に就任。同大学教育研究社会連携推進室長として地域活性化等の案件に取り組む傍ら、現在も団地再生や住宅団地に関する研究を継続。大阪府景観建築賞(1982年)や都市住宅学会賞著作賞(2017年)等を受賞。

## 生活美学研究所構成員

所長	森田 雅子	教授
運営委員会	委員長 委員 委員	森田 雅子 教授 三好 庸隆 教授 北島 見江 教授
研究員	管 宗次 藤本 憲一 黒田 智子 松井 徳光 三宅 正弘 藤井 達矢 村越 直子 宇野 朋子 松本佳久子 鎌田 誠史 和泉 志穂	教授 教授 教授 教授 准教授 准教授 講師 講師 准教授 准教授 講師
(囑託)	藤田 治彦 津曲 孝 坪内 稔典	大阪大学大学院教授 ケーキハウス ツマガリ 代表 京都教育大学名誉教授 佛教大学名誉教授
助手	前川 多仁 泊里 涼子 草野 桃子 酒井 稚恵	

2017年7月1日現在

---

## 阪神間ルネッサンスのために

---

ここで、「阪神間文化」の生活美学的実験を。

---

生活美学研究所が居をかまえる甲子園会館(旧甲子園ホテル)は、武庫の流れをのぞみ、ゆたかな緑につつまれて、文化的環境デザインの実験場であった。

世界各地から人が集い、ゆるりとホテルで憩いながら、多彩な議論をかわす理想郷であった。

この環境は、さきのいくさによって一度は失われたものの、今ふたたび甦りつつある。ここに新たな「生活美学」の視点から、阪神間に住まう人とともに、しずかなる実験の一步をしるしたい。

## 武庫川女子大学 生活美学研究所

〒663-8121 兵庫県西宮市戸崎町1番13号

TEL 0798-67-1291

FAX 0798-67-1503

E-mail. seibiken@mukogawa-u.ac.jp

URL. <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~seibiken/>